科目名	芸術学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	石井　元章				
クラス名					

授業目的と到達目標

本演習は美術史の学位論文研究遂行に必要な能力の涵養を目指す。

授業概要

学生の必要に応じて論文執筆を推進する指導を行なう。先行研究論文を輪読し、学術論文における日本語表現の陶冶を目指す。授業内容は参加者を考慮しながら、適宜変更する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

自らの論文執筆のために、先行研究をしっかり読んで、構成や文章表現を勉強すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
平常点	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容

1	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
2	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
3	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
4	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
5	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
6	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
7	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
8	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
9	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
10	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
11	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
12	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
13	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
14	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
15	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	

科目名	芸術学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	瀧本　雅志				
クラス名					

授業目的と到達目標

旧来の専門科目の枠に囚われず、研究テーマに適した様々な概念装置を、積極的に開発・活用しながら研究を進めてゆくことを目標とする。芸術学や批評理論にくわえて、哲学・現代思想・精神分析・メディア論・記号論等も適宜参考にし、ときには理科系の諸学の知見も援用する。諸芸術やデザイン、ポップカルチャーについて「現代的な」問題意識で考え感じようとする学生にとって、とりわけ触発や支援となる場の形成を目指してゆく。

授業概要

学生が研究対象のどのような可能性の中心を探ろうとするかを明確化する作業をサポートする。学生に、研究について口頭または文面で論じてもらい、その有効性や意義について共に分析するセッションを実施。その成果を次回にフィードバックさせ、次第に研究の強度を高めてゆく。そのためにも、議論や観点に有用な書物や論文を共同で探る。あるいは、直観的に感動的な作品や現象に魅了される喜びを重視し、その言語化をドライブする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

受講生各々の問題意識やニーズにあわせて、適宜アドバイスを行う。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1)受講者の研究テーマと現在利用している概念装置をと確認する。→2）授業の具体的なプログラムを共に立案する。→3)セッション　→4)フィードバック　→　その後、3)と 4)を繰り返す。また、ときおり有益なブレイクを挟む。

科目名	芸術学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	青山 勝				
クラス名					

授業目的と到達目標

芸術学の基本的な研究方法を学ぶ。各々の研究テーマを設定し、資料の扱い方、テクストの読解、議論の整理の仕方を習得していく。各自が修士論文を作成・完成することを到達目標とする。この授業を通じて、「建学の精神」にもどづいて定められた大学院の「教育目的」にあるように、美及び芸術における理論研究の能力を錬磨する。

授業概要

個々のテーマや項目に関する文献資料（研究書、雑誌論文、辞書項目、インターネット検索等）の調べ方、整理方法、まとめ方を習得する。最終的にはその成果を文章化し、提示するプレゼンテーションの手法を身につけることをめざす。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

各自のテーマに沿った文献調査を予め行っておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	レポート・論文の書き方入門（第 4 版）		
出版社名	慶應義塾大学出版会	著者名	河野哲也
参考書名2	情報生産者になる（ちくま新書）		
出版社名	筑摩書房	著者名	上野千鶴子
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入：研究テーマの設定、文献・資料の収集、先行研究の検討と方法論の確認
2	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討①
3	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討②
4	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討③
5	資料収集と先行研究の検討①
6	資料収集と先行研究の検討②
7	資料収集と先行研究の検討③
8	資料収集と先行研究の検討④
9	文献紹介と研究報告①
10	文献紹介と研究報告②
11	文献紹介と研究報告③
12	文献紹介と研究報告④
13	前期レポート作成①
14	前期レポート作成②
15	前期の振り返りとまとめ

科目名	芸術学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	青山　勝				
クラス名					

授業目的と到達目標

芸術学の基本的な研究方法を学ぶ。各々の研究テーマを設定し、資料の扱い方、テクストの読解、議論の整理の仕方を習得していく。各自が修士論文を作成・完成することを到達目標とする。この授業を通じて、「建学の精神」にもどづいて定められた大学院の「教育目的」にあるように、美及び芸術における理論研究の能力を錬磨する。

授業概要

個々のテーマや項目に関する文献資料（研究書、雑誌論文、辞書項目、インターネット検索等）の調べ方、整理方法、まとめ方を習得する。最終的にはその成果を文章化し、提示するプレゼンテーションの手法を身につけることをめざす。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

各自のテーマに沿った文献調査を予め行っておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	レポート・論文の書き方入門（第 4 版）		
出版社名	慶應義塾大学出版会	著者名	河野哲也
参考書名2	情報生産者になる（ちくま新書）		
出版社名	筑摩書房	著者名	上野千鶴子
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	後期への再導入。文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化①
2	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化②
3	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化③
4	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化④
5	研究報告とディスカッション①
6	研究報告とディスカッション②
7	研究報告とディスカッション③
8	研究報告とディスカッション④
9	研究報告と課題の検討①
10	研究報告と課題の検討②
11	研究報告と課題の検討③
12	研究報告と課題の検討④
13	研究成果のまとめ①
14	研究成果のまとめ②
15	全体の振り返り

科目名	芸術学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	石井　元章				
クラス名					

授業目的と到達目標

本演習は美術史の学位論文研究遂行に必要な能力の涵養を目指す。

授業概要

学生の必要に応じて論文執筆を推進する指導を行なう。先行研究論文を輪読し、学術論文における日本語表現の陶冶を目指す。
授業内容は参加者を考慮しながら、適宜変更する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

自らの論文執筆のために、先行研究をしっかり読んで、構成や文章表現を勉強すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
平常点	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験	
授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
2	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
3	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
4	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
5	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
6	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
7	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
8	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
9	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
10	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
11	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
12	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
13	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
14	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
15	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。

科目名	芸術学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	瀧本 雅志				
クラス名					

授業目的と到達目標

旧来の専門科目の枠に囚われず、研究テーマに適した様々な概念装置を、積極的に開発・活用しながら研究を進めてゆくことを目標とする。芸術学や批評理論にくわえて、哲学・現代思想・精神分析・メディア論・記号論等も適宜参考にし、ときには理科系の諸学の知見も援用する。諸芸術やデザイン、ポップカルチャーについて「現代的な」問題意識で考え感じようとする学生にとって、とりわけ触発や支援となる場の形成を目指してゆく。

授業概要

学生が研究対象のどのような可能性の中心を探ろうとするかを明確化する作業をサポートする。学生に、研究について口頭または文面で論じてもらい、その有効性や意義について共に分析するセッションを実施。その成果を次回にフィードバックさせ、次第に研究の強度を高めてゆく。そのためにも、議論や観点に有用な書物や論文を共同で探る。あるいは、直観的に感動的な作品や現象に魅了される喜びを重視し、その言語化をドライブする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

受講生各々の問題意識やニーズにあわせて、適宜アドバイスを行う。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1)受講者の研究テーマと現在利用している概念装置をと確認する。→2）授業の具体的なプログラムを共に立案する。→3)セッション　→4)フィードバック　→　その後、3)と 4)を繰り返す。また、ときおり有益なブレイクを挟む。

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	出口　逸平				
クラス名					

授業目的と到達目標

文芸学・演劇学で修士論文を書くための基礎知識を学び、具体的な作品分析をおこなう。
受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。
この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている。

授業概要

受講者それぞれの研究テーマにあわせ、まずは先行論文を丁寧に読み解き、論文の問題設定や構成を学ぶ。
そのうえで実際に作品の分析を試みる。
参加者同士の活発な質疑応答を期待する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

研究発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらう。
何に、どのような興味があるのか。よく探ってみて欲しい。
研究発表には相当の準備が必要となる。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1	各人の関心に応じて指導する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	各人の関心に応じて指導する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容	
1	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
2	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
3	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
4	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
5	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
6	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
7	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
8	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
9	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
10	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
11	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
12	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
13	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
14	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
15	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
16	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
17	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
18	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
19	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
20	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
21	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
22	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
23	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
24	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
25	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
26	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
27	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
28	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
29	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
30	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	出口　逸平				
クラス名					

授業目的と到達目標

文芸学・演劇学で修士論文を書くための基礎知識を学び、具体的な作品分析をおこなう。
受講生の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。
この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている

授業概要

受講者それぞれの研究テーマにあわせ、まずは先行論文を丁寧に読み解き、論文の問題設定や構成を学ぶ。
そのうえで実際に作品の分析を試みる。
参加者同士の活発な質疑応答を期待する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

研究発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらう。
何に、どのような興味があるのか。よく探ってみて欲しい。
研究発表には相当の準備が必要となる。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1	各人の研究テーマに応じて指導する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	各人の研究テーマに応じて指導する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
2	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
3	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
4	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
5	受講者の研究発表と質疑応答。
6	受講者の研究発表と質疑応答。
7	受講者の研究発表と質疑応答。
8	受講者の研究発表と質疑応答。

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	出口　逸平				
クラス名					

授業目的と到達目標

文芸学・演劇学で修士論文を書くための基礎知識を学び、具体的な作品分析をおこなう。
受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。
この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている。

授業概要

受講者それぞれの研究テーマにあわせ、まずは先行論文を丁寧に読み解き、論文の問題設定や構成を学ぶ。
そのうえで実際に作品の分析を試みる。
参加者同士の活発な質疑応答を期待する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

研究発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらう。
何に、どのような興味があるのか。よく探ってみて欲しい。
研究発表には相当の準備が必要となる。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1	各人の関心に応じて指導する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	各人の関心に応じて指導する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容	
1	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
2	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
3	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
4	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
5	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
6	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
7	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
8	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
9	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
10	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
11	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
12	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
13	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
14	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
15	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
16	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
17	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
18	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
19	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
20	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
21	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
22	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
23	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
24	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
25	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
26	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
27	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
28	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
29	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	
30	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。	

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	団野　恵美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

各個人が学術的興味を抱いた領域の中で、テーマを設定し、修士論文を作成する。

授業概要

学術論文を書くための技術を身につけ、専門領域の中からテーマ選びをして、論文を仕上げるまでを指導する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

修士論文執筆の学生は、原稿チェックを受けながら論文の完成を目指すこと。1 年生は専門領域のテーマにそって、先行研究を調査し、その成果を発表できるようにすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題提出	70
個人発表	30

教科書

教科書1	学生各々のテーマに応じて指導する		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス：各個人の研究分野について発表・相談
2	論文とはどういうものか
3	図書館の利用、資料収集について
4	専門領域における論文のテーマ決定
5	各個人について、論文のテーマのための読書リスト作り
6	文献引用について、原稿の書き方など
7	論文の章立て
8	論文チェック
9	論文チェック
10	中間発表：各個人が執筆中の論文について発表をする
11	論文チェック
12	論文チェック
13	論文チェック
14	論文チェック
15	前期論文提出
16	前期提出の論文について返却と講評
17	新しい視点と調査について
18	論文を仕上げるまでの計画
19	論文執筆しながらの研究について
20	論文チェック
21	論文チェック
22	論文チェック
23	論文チェック
24	論文チェック
25	論文チェック
26	論文チェック
27	グループ内で論文発表
28	論文チェック
29	論文最終チェック
30	後期論文提出

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	出口　逸平				
クラス名					

授業目的と到達目標

文芸学・演劇学で修士論文を書くための基礎知識を学び、具体的な作品分析をおこなう。
受講生の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。
この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている

授業概要

受講者それぞれの研究テーマにあわせ、まずは先行論文を丁寧に読み解き、論文の問題設定や構成を学ぶ。
そのうえで実際に作品の分析を試みる。
参加者同士の活発な質疑応答を期待する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

研究発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらう。
何に、どのような興味があるのか。よく探ってみて欲しい。
研究発表には相当の準備が必要となる。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1	各人の研究テーマに応じて指導する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	各人の研究テーマに応じて指導する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
2	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
3	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
4	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
5	受講者の研究発表と質疑応答。
6	受講者の研究発表と質疑応答。
7	受講者の研究発表と質疑応答。
8	受講者の研究発表と質疑応答。

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	団野　恵美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

各個人が学術的興味を抱いた領域の中で、テーマを設定し、修士論文を作成する。

授業概要

学術論文を書くための技術を身につけ、専門領域の中からテーマ選びをして、論文を仕上げるまでを指導する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

修士論文執筆の学生は、原稿チェックを受けながら論文の完成を目指すこと。1 年生は専門領域のテーマにそって、先行研究を調査し、その成果を発表できるようにすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題提出	70
授業内発表	30

教科書

教科書1	学生各々のテーマに応じて指導する		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	前期提出の論文について返却と講評
2	新しい視点と調査について
3	論文を仕上げるまでの計画
4	論文執筆しながらの研究について
5	論文チェックと指導
6	論文チェックと指導
7	論文チェックと指導
8	論文チェックと指導
9	論文チェックと指導
10	論文チェックと指導
11	論文チェックと指導
12	授業内で論文発表
13	論文チェックと指導
14	論文最終チェック
15	後期の論文提出

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	団野　恵美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

各個人が学術的興味を抱いた領域の中で、テーマを設定し、修士論文を作成する。

授業概要

学術論文を書くための技術を身につけ、専門領域の中からテーマ選びをして、論文を仕上げるまでを指導する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

修士論文執筆の学生は、原稿チェックを受けながら論文の完成を目指すこと。1 年生は専門領域のテーマにそって、先行研究を調査し、その成果を発表できるようにすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題提出	70
個人発表	30

教科書

教科書1	学生各々のテーマに応じて指導する		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス：各個人の研究分野について発表・相談
2	論文とはどういうものか
3	図書館の利用、資料収集について
4	専門領域における論文のテーマ決定
5	各個人について、論文のテーマのための読書リスト作り
6	文献引用について、原稿の書き方など
7	論文の章立て
8	論文チェック
9	論文チェック
10	中間発表：各個人が執筆中の論文について発表をする
11	論文チェック
12	論文チェック
13	論文チェック
14	論文チェック
15	前期論文提出
16	前期提出の論文について返却と講評
17	新しい視点と調査について
18	論文を仕上げるまでの計画
19	論文執筆しながらの研究について
20	論文チェック
21	論文チェック
22	論文チェック
23	論文チェック
24	論文チェック
25	論文チェック
26	論文チェック
27	グループ内で論文発表
28	論文チェック
29	論文最終チェック
30	後期論文提出

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	団野　恵美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

各個人が学術的興味を抱いた領域の中で、テーマを設定し、修士論文を作成する。

授業概要

学術論文を書くための技術を身につけ、専門領域の中からテーマ選びをして、論文を仕上げるまでを指導する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

修士論文執筆の学生は、原稿チェックを受けながら論文の完成を目指すこと。1 年生は専門領域のテーマにそって、先行研究を調査し、その成果を発表できるようにすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題提出	70
授業内発表	30

教科書

教科書1	学生各々のテーマに応じて指導する		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	前期提出の論文について返却と講評
2	新しい視点と調査について
3	論文を仕上げるまでの計画
4	論文執筆しながらの研究について
5	論文チェックと指導
6	論文チェックと指導
7	論文チェックと指導
8	論文チェックと指導
9	論文チェックと指導
10	論文チェックと指導
11	論文チェックと指導
12	授業内で論文発表
13	論文チェックと指導
14	論文最終チェック
15	後期の論文提出

科目名	音楽学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	津上　智実				
クラス名					

授業目的と到達目標

論文の書き方を学ぶ。音楽について書かれたものを読み、考え、書くというステップを通じて、自分が音楽のどのような側面に興味があるのかを明確にしていくことをめざす。

授業概要

論文を書くための基本的な考え方と方法を学ぶ。論文を真に有意義なものとするためには、自分が本当に興味の持てるテーマに出会うことが大切である。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業中課題（提出物、レポート）	30
参加度	20
授業中発表	20
期末レポート	30

教科書

教科書1	『論文ゼミナール』		
出版社名	東京大学出版会、2014	著者名	佐々木健一
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
音楽学の研究者が、多数の論考や学会発表をしてきた経験を活かして、音楽に関する論考を書く方法を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入
2	音楽について書くこと
3	テーマの考え方
4	主な音楽事典
5	文献を探す
6	インターネットを活用する
7	図書館を使う
8	楽譜を選ぶ
9	分析を考える
10	論の組み立て
11	学術的な文章とは
12	論文を書くとは
13	引用と文章のマナー
14	発表の媒体
15	総括

科目名	音楽学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	津上　智実				
クラス名					

授業目的と到達目標

論文の書き方を学ぶ。音楽について書かれたものを読み、考え、書くというステップを通じて、自分が音楽のどのような側面に興味があるのかを明確にしていくことをめざす。

授業概要

論文を書くための基本的な考え方と方法を学ぶ。論文を真に有意義なものとするためには、自分が本当に興味の持てるテーマに出会うことが大切である。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

好奇心を発揮して、積極的に読んだり書いたり話したりすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業中課題（提出物、レポート）	30
参加度	20
授業中発表	20
期末レポート	30

教科書

教科書1	『論文ゼミナール』		
出版社名	東京大学出版会、2014	著者名	佐々木健一
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
音楽学の研究者が、多数の論考や学会発表をしてきた経験を活かして、音楽に関する論考を書く方法を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入
2	音楽について書くこと
3	テーマの考え方
4	主な音楽事典
5	文献を探す
6	インターネットを活用する
7	図書館を使う
8	楽譜を選ぶ
9	分析を考える
10	論の組み立て
11	学術的な文章とは
12	副論文を書くには
13	引用と文章のマナー
14	発表の形態
15	総括

科目名	芸術学作品研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	加賀城　健				
クラス名					

授業目的と到達目標

学生がこれまでに取り組んできた作品や技法、展示方法など、研究内容を客観的に分析する。また、銘々の専門分野と他分野おける歴史的背景や作品の先行事例を調査することによって創作する意義を考える。
作品を展開する能力を身につける為に、考えたアイデアに実際に取り組み、その成果を検証する。
ワークショップや茶会を模索することで、プレゼンテーション能力を高める。

授業概要

毎回授業内容の説明を行い、授業時間内に調査や発表、制作を行う。
研究の内容に伴い調整の上、各学生の制作場所や学内展示スペース、学外に移動する場合がある。
基本対面で授業を行い、グループワークを含むディスカッションの時間を多くとる。
変更が生じた場合、速やかに掲示登録する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

パワーポイント等のプレゼンテーションツールの使用が望ましい。可能であれば入手・習熟しておくこと。
シラバスの進度は受講生の取り組みにより調整する。
欠席の場合は欠席理由を知らせること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
出席・積極性	70
授業内発表・レポート・制作物	30

教科書

教科書1	必要に応じて資料を配布する		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
学内外での見学や聴講を実施する場合がある。

教員実務経験
染色家の教員が、多数の作品を制作発表してきた経験と、美術・工芸分野での制作指導の経験を活かして、作品制作研究の能力を向上させる授業を行う。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	授業内容を説明する
2	教員自己紹介
3	自己紹介（ルーツについて）
4	自己紹介（ルーツについて）のつづき
5	作品の分析 I（技術・技法に関する考察）
6	作品の分析 I（技術・技法に関する考察）のつづき
7	技術・技法の試み−ワークショップ
8	技術・技法の試み−ワークショプのつづき
9	作品の分析 II（歴史に関する考察）
10	作品の分析 II（歴史に関する考察）のつづき
11	歴史考察からの試み−ワークショップ 2
12	歴史考察からの試み−ワークショップ 2 のつづき
13	茶会づくり
14	茶会づくりのつづき
15	前期総括、レポートの課題説明

科目名	芸術学作品研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	加賀城　健				
クラス名					

授業目的と到達目標

学生がこれまでに取り組んできた作品や技法、展示方法など、研究内容を客観的に分析する。また、銘々の専門分野と他分野おける歴史的背景や作品の先行事例を調査することによって創作する意義を考える。
作品を展開する能力を身につける為に、考えたアイデアに実際に取り組み、その成果を検証する。
ワークショップや茶会を模索することで、プレゼンテーション能力を高める。

授業概要

毎回授業内容の説明を行い、授業時間内に調査や発表、制作を行う。
研究の内容に伴い調整の上、各学生の制作場所や学内展示スペース、学外に移動する場合がある。
基本対面で授業を行い、グループワークを含めたディスカッションの時間を多くとる。
変更が生じた場合、速やかに掲示登録する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

パワーポイント等のプレゼンテーションツールの使用が望ましい。可能であれば入手・習熟しておくこと。
シラバスの進度は受講生の取り組みにより調整する。
欠席の場合は欠席理由を知らせること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
出席・積極性	70
授業内発表・レポート・制作物	30

教科書

教科書1	必要に応じて資料を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
学内外での見学や聴講を実施する場合がある。

教員実務経験
染色家の教員が、多数の作品を制作発表してきた経験と、美術・工芸分野での制作指導の経験を活かして、作品制作研究の能力を向上させる授業を行う。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	授業内容を説明するレポートの発表と前期制作物の講評
2	レポートの発表と前期制作物の講評
3	展覧会研究 II（作品鑑賞から学ぶ）
4	展覧会研究 II（作品鑑賞から学ぶ）のつづき
5	作家研究 I（専門分野）
6	作家研究からの試み−計画発表
7	作家研究からの試み−ワークショップ 3
8	作家研究からの試み−ワークショップ 3 のつづき
9	作家研究 II（専門外の分野）
10	作家研究 II からの試み−計画発表
11	作家研究 II からの試み−ワークショップ 4
12	作家研究 II からの試み−ワークショップ 4 のつづき
13	茶会づくり 2
14	茶会づくり 2 のつづき
15	後期総括

科目名	文芸学作品研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	福井　慎二				
クラス名					

授業目的と到達目標

ディプロマポリシーにある小説家・国語科教員としての専門知識を身につけるために昭和文学の古典と言える太宰治の作品を読むことで小説の書き方・表現を学んだり、国語の教材研究に役立てることを目的にする。太宰の作品理解を深めることを目標とする。

授業概要

受講者が太宰の初期の作品を読み、作品を理解する上で何を問題にしたらよいか考えたことを毎回発表し討論する。アニメ・映画も参照して言語表現と映像表現との違いなどを感じて、作品理解を深められるようにする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

作品を読んで問題点を考え、授業で意見発表できるように準備することが必要。作品を読むのに 30 分～数時間かかり、問題点を考えるのに数時間必要となる。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
主体的な授業参加	20
レポートまたは授業の発表担当	70
授業態度	10

教科書

教科書1	授業中にプリントを配布する		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
太宰の作品は著作権切れのため「青空文庫」のホームページで無料で閲覧・ダウンロード可能です。国立国会図書館の蔵書検索通じても閲覧できます。手持ちの本も利用してください。
教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1ガイダンス・発表担当者決定　太宰の伝記 太宰の作品は私小説のため、伝記確認して作品理解に役立てる。
2	2私小説について（講義） 大正時代に私小説が生まれた文学史的状況と私小説をめぐる論争、現代の私小説作家の捉え方を確認する。
3	3「葉」（以下レポート発表と討議） 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
4	4「魚服記」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
5	5「猿面冠者」 入れ子構造の小説形式を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
6	6「思ひ出」 ビデオ鑑賞 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
7	7「道化の華」 映画「ピカレスク　人間失格」参照 太宰のメタフィクションの独自性を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
8	8「狂言の神」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
9	9「虚構の春」 太宰の書簡体小説の独自性を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
10	10「ダス・ゲマイネ」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
11	11「二十世紀旗手」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
12	12「HUMAN　LOST」映画「ピカレスク　人間失格」参照 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
13	13「姥捨」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
14	14「富嶽百景」その1　TVドラマ・映画「富嶽百景」鑑賞 言語表現と映像表現との違いなどを感じるべく、『富嶽百景』の映画の特徴を確認し参照し、次回の討論に役立てる。

１５	15「富嶽百景」その２　レポート発表と討論 【授業中の発表を担当しなかった学生のレポート提出期限　提出先はUNIPA「課題提出」】

科目名	文芸学作品研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	福井　慎二				
クラス名					

授業目的と到達目標

ディプロマポリシーにある小説家・国語科教員としての専門知識を身につけるために昭和文学の古典と言える太宰治の作品を読むことで小説の書き方・表現を学んだり、国語の教材研究に役立てることを目的にする。太宰の作品理解を深めることを目標とする

授業概要

受講者が太宰の中期の作品を読み、作品を理解する上で何を問題にしたらよいか考えたことを毎回発表し討論する。アニメ・映画も参照して言語表現と映像表現との違いなどを感じて、作品理解を深められるようにする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

作品を読んで問題点を考え、授業で意見発表できるように準備することが必要。作品を読むのに 30 分～数時間かかり、問題点を考えるのに数時間必要となる。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
主体的な授業参加	20
レポートまたは授業の発表担当	70
授業態度	10

教科書

教科書1	授業中にプリントを配布する		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
太宰の作品は著作権切れのため「青空文庫」のホームページで無料で閲覧・ダウンロード可能です。国立国会図書館の蔵書検索通じても閲覧できます。手持ちの本も利用してください。
教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス・発表担当者決定
2	『秋風記』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
3	『女生徒』 アニメ「女生徒」鑑賞　朗読CD 太宰の女性独白体の特徴を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
4	『駆け込み訴へ』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
5	『カチカチ山』（『御伽草紙』①）　参考DVD「桃太郎　海の神兵」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
6	『浦島さん』（『御伽草紙』②） 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
7	『女の決闘』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
8	『走れメロス』その1　アニメ「走れメロス」鑑賞 言語表現と映像表現との違いなどを感じるべく、『走れメロス』のアニメの特徴を確認し参照し、次回の討論に役立てる。
9	『走れメロス』その2　レポート発表と討論 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
10	『竹青』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
11	『新樹の言葉』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
12	『右大臣実朝』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
13	『貧の意地』（『新釈諸国噺』Ⅰ） 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
14	『赤い太鼓』（『新釈諸国噺』Ⅱ） 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
15	『津軽』

	【授業中の発表を担当しなかった学生のレポート提出期限　提出先はUNIPA「課題提出」】	

科目名	演劇学作品研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	出口　逸平				
クラス名					

授業目的と到達目標

受講者による演劇作品（映画・ミュージカル・オペラ等を含む）の研究発表と質疑応答をおこなう。
受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。
この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている

授業概要

受講者の研究発表と質疑応答によって、授業をすすめる。
取り上げる作品は、受講者の希望をできるかぎり尊重したい。
随時上演ビデオを利用する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらう。
何に、どのような興味があるのか。よく探ってみて欲しい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1	各人の関心に応じて指導する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	各人の関心に応じて指導する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
2	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
3	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
4	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
5	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
6	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
7	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
8	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
9	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
10	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
11	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
12	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
13	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
14	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
15	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。

科目名	演劇学作品研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	出口　逸平				
クラス名					

授業目的と到達目標

受講者による演劇作品（映画・ミュージカル・オペラ等を含む）の研究発表と質疑応答をおこなう。
受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。
この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている

授業概要

受講者の研究発表と質疑応答によって、授業をすすめる。
取り上げる作品は、受講者の希望をできるかぎり尊重したい。
随時上演ビデオを利用する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらう。
何に、どのような興味があるのか。よく探ってみて欲しい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1	各人の関心に応じて指導する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	各人の関心に応じて指導する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
2	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
3	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
4	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
5	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
6	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
7	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
8	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
9	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
10	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
11	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
12	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
13	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
14	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。
15	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と質疑応答に充てられる。

科目名	音楽学作品研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	津上　智実				
クラス名					

授業目的と到達目標

フランツ・シューベルト（1797～1828）の連作歌曲集《冬の旅》（1827）を教材として、ドイツ・リートの味わい方をじっくりと学ぶ。ドイツ詩の言葉のリズムと美しさを、詩の韻律パターン（ヤンブスやアナペストなど）や押韻パターン（脚韻や頭韻など）に目を配りながら読み上げる形でよく味わい、その上で実際の楽曲でどのように生かされているかを理解する力を身につける。

授業概要

ドイツ・リートの味わい方をじっくりと学ぶ。今年度はフランツ・シューベルト（1797～1828）の連作歌曲集《冬の旅》（1827）を教材とする。古典的なドイツ・リートの歌詞は、言葉の響きとリズムが整えられた韻文なので、まずはその構造について学ぶ。詩の韻律パターン（ヤンブスやアナペストなど）や押韻パターン（脚韻や頭韻など）を理解して読み上げることで、ドイツ詩の言葉のリズムと美しさを味わう力を身につける。さらに、そうした詩文のリズムや美しさが実際の楽曲において、どのように反映されて生かされているかを考察した上で、複数の歌い手の録音を比較検討する。前期で《冬の旅》第1部の 12 曲、後期で同第2部の 12 曲について学ぶ。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

よく聴く、よく読む、よく考える。折々に小さな課題を出すので、主体的に積極的に取り組むこと（週 90 分程度）。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業態度	30
ミニ・レポート	20
中間・期末レポート	50

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	シューベルト：冬の旅		
出版社名	音楽之友社、On Books Advance 04, 2023	著者名	喜多尾道冬
参考書名2	シューベルトの「冬の旅」		
出版社名	岡本時子・岡本順治訳（アルテスパブリッシング、2017）	著者名	イアン・ボストリッジ
参考書名3	ヴィルヘルム・ミュラーの生涯と作品：《冬の旅》を中心に		
出版社名	東北大学出版会、2017	著者名	渡辺美奈子
参考書名4	シューベルトの歌曲をたどって		
出版社名	原田茂生訳（白水社、2012）	著者名	D. フィッシャー＝ディースカウ

参考書名５	ドイツ詩を読む人のために：韻律論的ドイツ詩鑑賞		
出版社名	郁文堂、1989	著者名	山口四郎

参考 URL

特記事項

シューベルト《冬の旅》の楽譜を用意してくること。版についての指定は特にない。

教員実務経験

音楽学の研究者が、多数の論考や学会発表をしてきた経験を活かして、ドイツ・リートの学び方と味わい方を指導する。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	導入：問題設定と参考文献
2	ドイツ詩の言葉のリズム
3	第1曲〈おやすみ〉
4	第2曲〈風見の旗〉
5	第3曲〈凍る涙〉
6	第4曲〈かじかみ〉
7	第5曲〈菩提樹〉
8	第6曲〈あふれる涙〉
9	第7曲〈川の上で〉
10	第8曲〈顧みて〉
11	第9曲〈鬼火〉
12	第 10 曲〈憩〉
13	第 11 曲〈春の夢〉
14	第 12 曲〈孤独〉
15	総括

科目名	音楽学作品研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	津上　智実				
クラス名					

授業目的と到達目標

フランツ・シューベルト（1797～1828）の連作歌曲集《冬の旅》（1827）を教材として、ドイツ・リートの味わい方をじっくりと学ぶ。ドイツ詩の言葉のリズムと美しさを、詩の韻律パターン（ヤンブスやアナペストなど）や押韻パターン（脚韻や頭韻など）に目を配りながら読み上げる形でよく味わい、その上で実際の楽曲でどのように生かされているかを理解する力を身につける。

授業概要

ドイツ・リートの味わい方をじっくりと学ぶ。今年度はフランツ・シューベルト（1797～1828）の連作歌曲集《冬の旅》（1827）を教材とする。古典的なドイツ・リートの歌詞は、言葉の響きとリズムが整えられた韻文なので、まずはその構造について学ぶ。詩の韻律パターン（ヤンブスやアナペストなど）や押韻パターン（脚韻や頭韻など）を理解して読み上げることで、ドイツ詩の言葉のリズムと美しさを味わう力を身につける。さらに、そうした詩文のリズムや美しさが実際の楽曲において、どのように反映されて生かされているかを考察した上で、複数の歌い手の録音を比較検討する。 前期で《冬の旅》第1部の 12 曲、後期で同第2部の 12 曲について学ぶ。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

よく聴く、よく読む、よく考える。折々に小さな課題を出すので、主体的に積極的に取り組むこと（週 90 分程度）。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業態度	30
ミニ・レポート	20
中間・期末レポート	50

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	シューベルト：冬の旅		
出版社名	音楽之友社、On Books Advance 04, 2023	著者名	喜多尾道冬
参考書名2	シューベルトの「冬の旅」		
出版社名	岡本時子・岡本順治訳（アルテスパブリッシング、2017）	著者名	イアン・ボストリッジ
参考書名3	ヴィルヘルム・ミュラーの生涯と作品：《冬の旅》を中心に		
出版社名	東北大学出版会、2017	著者名	渡辺美奈子
参考書名4	シューベルトの歌曲をたどって		
出版社名	原田茂生訳（白水社、2012）	著者名	D. フィッシャー＝ディースカウ

参考書名５	ドイツ詩を読む人のために：韻律論的ドイツ詩鑑賞		
出版社名	郁文堂、1989	著者名	山口四郎

参考 URL

特記事項

シューベルト《冬の旅》の楽譜を用意してくること。版についての指定は特にない。

教員実務経験

音楽学の研究者が、多数の論考や学会発表をしてきた経験を活かして、ドイツ・リートの学び方と味わい方を指導する。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	導入：問題設定と参考文献
2	ドイツ詩を味わうには
3	第 13 曲〈郵便馬車〉
4	第 14 曲〈霜おく髪〉
5	第 15 曲〈からす〉
6	第 16 曲〈最後の希望〉
7	第 17 曲〈村にて〉
8	第 18 曲〈嵐の朝〉
9	第 19 曲〈まぼろし〉
10	第 20 曲〈道しるべ〉
11	第 21 曲〈宿屋〉
12	第 22 曲〈勇気〉
13	第 23 曲〈幻の太陽〉
14	第 24 曲〈辻音楽師〉
15	総括

科目名	原典研究9	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	龍本　那津子				
クラス名					

授業目的と到達目標

『源氏物語』に代表される日本の古典文学について、基礎的なことを学び、実際の作品を読んで理解を深め、日本の古典文学に親しむことを目的とする。

授業概要

『源氏物語』に関する基本的な知識を学びつつ、巻ごとにテキストに従って読み進める。同時に平安時代の物語に見られる当時の文化や言語についても知見を深める。
また、必要に応じて同時代の物語や和歌、日記などにもふれていく。これらの文学作品を読むことによって、当時の人々のものの見方や感じ方をうかがい知ることができよう。授業では各自担当箇所を決めて輪読形式で進めていく。
また、学生の興味関心に応じて随時研究発表を取り入れていく。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

古語辞典（出版社問わず・電子辞書可）は必ず用意すること。
『源氏物語』の本文（原文）が載っているテキスト（文庫本でよい）があれば望ましい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業に取り組む態度	70
レポート	30

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業で紹介する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	『源氏物語』について 基礎知識と資料の紹介
2	源氏物語を読む　桐壺①
3	源氏物語を読む　桐壺②
4	源氏物語を読む　桐壺③
5	源氏物語を読む　帚木①
6	源氏物語を読む　帚木②
7	源氏物語を読む　帚木③
8	源氏物語を読む　帚木④
9	源氏物語を読む　空蝉①
10	源氏物語を読む　空蝉②
11	源氏物語を読む　空蝉③
12	源氏物語を読む　空蝉④
13	平安時代の女性と文学
14	『紫部日記』と『紫式部集』
15	前期のまとめとレポートについての注意

科目名	原典研究10	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	龍本　那津子				
クラス名					

授業目的と到達目標

『源氏物語』に代表される日本の古典文学について、基礎的なことを学び、実際の作品を読んで理解を深め、日本の古典文学に親しむことを目的とする。

授業概要

『源氏物語』に関する基本的な知識を学びつつ、巻ごとにテキストに従って読み進める。同時に平安時代の物語に見られる当時の文化や言語についても知見を深める。
また、必要に応じて同時代の物語や和歌、日記などにもふれていく。これらの文学作品を読むことによって、当時の人々のものの見方や感じ方をうかがい知ることができよう。授業では各自担当箇所を決めて輪読形式で進めていく。
また、学生の興味関心に応じて随時研究発表を取り入れていく。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

古語辞典（出版社問わず・電子辞書可）は必ず用意すること。
『源氏物語』の本文（原文）が載っているテキスト（文庫本でよい）があれば望ましい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業に取り組む態度	70
発表	30

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業で紹介する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	『源氏物語』について 基礎知識と資料の紹介
2	源氏物語を読む　夕顔①
3	源氏物語を読む　夕顔②
4	源氏物語を読む　夕顔③
5	源氏物語を読む　夕顔④
6	源氏物語を読む　夕顔⑤
7	源氏物語を読む　若紫①
8	源氏物語を読む　若紫②
9	源氏物語を読む　若紫③
10	源氏物語を読む　若紫④
11	源氏物語を読む　若紫⑤
12	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答①
13	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答②
14	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答③
15	後期のまとめ 源氏物語と現代

科目名	芸術学研究演習1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	石井　元章				
クラス名					

授業目的と到達目標

本演習は美術史の学位論文研究遂行に必要な能力の涵養を目指す。

授業概要

学生の必要に応じて論文執筆を推進する指導を行なう。先行研究論文を輪読し、学術論文における日本語表現の陶冶を目指す。
授業内容は参加者を考慮しながら、適宜変更する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

自らの論文執筆のために、先行研究をしっかり読んで、構成や文章表現を勉強すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
平常点	1

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験	
授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
2	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
3	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
4	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
5	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
6	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
7	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
8	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
9	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
10	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
11	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
12	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
13	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
14	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。
15	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。

科目名	芸術学研究演習1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	瀧本　雅志				
クラス名					

授業目的と到達目標

旧来の専門科目の枠に囚われず、研究テーマに適した様々な概念装置を、積極的に開発・活用しながら研究を進めてゆくことを目標とする。芸術学や批評理論にくわえて、哲学・現代思想・精神分析・メディア論・記号論等も適宜参考にし、ときには理科系の諸学の知見も援用する。諸芸術やデザイン、ポップカルチャーについて「現代的な」問題意識で考え感じようとする学生にとって、とりわけ触発や支援となる場の形成を目指してゆく。

授業概要

学生が研究対象のどのような可能性の中心を探ろうとするかを明確化する作業をサポートする。学生に、研究について口頭または文面で論じてもらい、その有効性や意義について共に分析するセッションを実施。その成果を次回にフィードバックさせ、次第に研究の強度を高めてゆく。そのためにも、議論や観点に有用な書物や論文を共同で探る。あるいは、直観的に感動的な作品や現象に魅了される喜びを重視し、その言語化をドライブする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

受講生各々の問題意識やニーズにあわせて、適宜アドバイスを行う。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1)受講者の研究テーマと現在利用している概念装置をと確認する。→2）授業の具体的なプログラムを共に立案する。→3)セッション　→4)フィードバック　→　その後、3)と 4)を繰り返す。また、ときおり有益なブレイクを挟む。

科目名	芸術学研究演習1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	青山 勝				
クラス名					

授業目的と到達目標

芸術学の基本的な研究方法を学ぶ。各々の研究テーマを設定し、資料の扱い方、テクストの読解、議論の整理の仕方を習得していく。各自が修士論文を作成・完成することを到達目標とする。この授業を通じて、「建学の精神」にもどづいて定められた大学院の「教育目的」にあるように、美及び芸術における理論研究の能力を錬磨する。

授業概要

個々のテーマや項目に関する文献資料（研究書、雑誌論文、辞書項目、インターネット検索等）の調べ方、整理方法、まとめ方を習得する。最終的にはその成果を文章化し、提示するプレゼンテーションの手法を身につけることをめざす。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

各自のテーマに沿った文献調査を予め行っておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	レポート・論文の書き方入門（第 4 版）		
出版社名	慶應義塾大学出版会	著者名	河野哲也
参考書名2	情報生産者になる（ちくま新書）		
出版社名	筑摩書房	著者名	上野千鶴子
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入：研究テーマの設定、文献・資料の収集、先行研究の検討と方法論の確認
2	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討①
3	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討②
4	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討③
5	資料収集と先行研究の検討①
6	資料収集と先行研究の検討②
7	資料収集と先行研究の検討③
8	資料収集と先行研究の検討④
9	文献紹介と研究報告①
10	文献紹介と研究報告②
11	文献紹介と研究報告③
12	文献紹介と研究報告④
13	前期レポート作成①
14	前期レポート作成②
15	前期の振り返りとまとめ

科目名	芸術学研究演習2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	石井　元章				
クラス名					

授業目的と到達目標

本演習は美術史の学位論文研究遂行に必要な能力の涵養を目指す。

授業概要

学生の必要に応じて論文執筆を推進する指導を行なう。先行研究論文を輪読し、学術論文における日本語表現の陶冶を目指す。授業内容は参加者を考慮しながら、適宜変更する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

自らの論文執筆のために、先行研究をしっかり読んで、構成や文章表現を勉強すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
平常点	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）		
授業回	授業内容	
1	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
2	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
3	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
4	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
5	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
6	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
7	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
8	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
9	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
10	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
11	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
12	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
13	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
14	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
15	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	

科目名	芸術学研究演習2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	瀧本　雅志				
クラス名					

授業目的と到達目標

旧来の専門科目の枠に囚われず、研究テーマに適した様々な概念装置を、積極的に開発・活用しながら研究を進めてゆくことを目標とする。芸術学や批評理論にくわえて、哲学・現代思想・精神分析・メディア論・記号論等も適宜参考にし、ときには理科系の諸学の知見も援用する。諸芸術やデザイン、ポップカルチャーについて「現代的な」問題意識で考え感じようとする学生にとって、とりわけ触発や支援となる場の形成を目指してゆく。

授業概要

学生が研究対象のどのような可能性の中心を探ろうとするかを明確化する作業をサポートする。学生に、研究について口頭または文面で論じてもらい、その有効性や意義について共に分析するセッションを実施。その成果を次回にフィードバックさせ、次第に研究の強度を高めてゆく。そのためにも、議論や観点に有用な書物や論文を共同で探る。あるいは、直観的に感動的な作品や現象に魅了される喜びを重視し、その言語化をドライブする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

受講生各々の問題意識やニーズにあわせて、適宜アドバイスを行う。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1)受講者の研究テーマと現在利用している概念装置をと確認する。→2）授業の具体的なプログラムを共に立案する。→3)セッション　→4)フィードバック　→　その後、3)と 4)を繰り返す。また、ときおり有益なブレイクを挟む。

科目名	芸術学研究演習2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	青山 勝				
クラス名					

授業目的と到達目標

芸術学の基本的な研究方法を学ぶ。各々の研究テーマを設定し、資料の扱い方、テクストの読解、議論の整理の仕方を習得していく。各自が修士論文を作成・完成することを到達目標とする。この授業を通じて、「建学の精神」にもどづいて定められた大学院の「教育目的」にあるように、美及び芸術における理論研究の能力を錬磨する。

授業概要

個々のテーマや項目に関する文献資料（研究書、雑誌論文、辞書項目、インターネット検索等）の調べ方、整理方法、まとめ方を習得する。最終的にはその成果を文章化し、提示するプレゼンテーションの手法を身につけることをめざす。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

各自のテーマに沿った文献調査を予め行っておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	レポート・論文の書き方入門（第 4 版）		
出版社名	慶應義塾大学出版会	著者名	河野哲也
参考書名2	情報生産者になる（ちくま新書）		
出版社名	筑摩書房	著者名	上野千鶴子
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	後期への再導入。文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化①
2	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化②
3	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化③
4	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化④
5	研究報告とディスカッション①
6	研究報告とディスカッション②
7	研究報告とディスカッション③
8	研究報告とディスカッション④
9	研究報告と課題の検討①
10	研究報告と課題の検討②
11	研究報告と課題の検討③
12	研究報告と課題の検討④
13	研究成果のまとめ①
14	研究成果のまとめ②
15	全体の振り返り

科目名	文芸学・演劇学研究演習1	年次	1	単位数	4
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	永田　靖				
クラス名					

授業目的と到達目標

本演習は、修士論文・博士論文の執筆を目的とする大学院生を対象に、研究テーマの深化、先行研究の精査、理論枠組みの構築、論文構成の設計を段階的に行うことを目的とする。
演劇学・パフォーマンス研究を中心としつつ、各自の研究課題に応じて文献読解、作品分析、方法論の検討を行い、学術的水準に達する論文執筆能力を養う。

授業概要

本演習は少人数制の研究指導形式で行う。
前期は研究課題の明確化と文献読解を中心に進め、後期は論文執筆の実践的指導を行う。
受講者の研究分野（近現代演劇史、インターカルチュラリズム、ドラマ論、上演分析、デジタル・パフォーマンス、エコロジカル・アート、伝統と現代など）に応じて、適宜テーマ別の討議を行う。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	オリエンテーション／研究テーマ確認
2	研究課題の設定方法
3	先行研究の整理方法
4	理論的枠組みの構築
5	方法論の検討（歴史研究、作品分析、批評理論）
6	個別研究報告①
7	個別研究報告②
8	引用・注記・文献整理
9	論文構成の設計
10	章立て案の検討
11	草稿発表①
12	草稿発表②
13	中間総括
14	修正とその方法
15	最終報告

科目名	文芸学・演劇学研究演習1	年次	1	単位数	4
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	団野　恵美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

各個人が学術的興味を抱いた領域の中で、テーマを設定し、修士論文を作成する。

授業概要

学術論文を書くための技術を身につけ、専門領域の中からテーマ選びをして、論文を仕上げるまでを指導する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

修士論文執筆の学生は、原稿チェックを受けながら論文の完成を目指すこと。1 年生は専門領域のテーマにそって、先行研究を調査し、その成果を発表できるようにすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題提出	70
個人発表	30

教科書

教科書1	学生各々のテーマに応じて指導する		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス：各個人の研究分野について発表・相談
2	論文とはどういうものか
3	図書館の利用、資料収集について
4	専門領域における論文のテーマ決定
5	各個人について、論文のテーマのための読書リスト作り
6	文献引用について、原稿の書き方など
7	論文の章立て
8	論文チェック
9	論文チェック
10	中間発表：各個人が執筆中の論文について発表をする
11	論文チェック
12	論文チェック
13	論文チェック
14	論文チェック
15	前期論文提出

科目名	文芸学・演劇学研究演習２	年次	1	単位数	4
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	永田　靖				
クラス名					

授業目的と到達目標

本演習は、修士論文および博士論文の完成を目標とし、研究内容の深化、論証の精緻化、文章表現の改善を段階的に行うことを目的とする。受講者は自身の研究テーマに基づき、草稿の作成・再構成・推敲を行い、学術的水準に達する論文を完成させる。

授業概要

本演習は少人数制で実施し、個別指導と討議を中心に進める。
各受講者は定期的に章ごとの草稿を提出し、討議を通じて論証の妥当性、概念の精度、構成の一貫性を検討する。
研究倫理、引用方法、学術的表現の適切性についても確認し、論文提出に向けた最終的な完成度を高める。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	研究進捗確認／提出スケジュール策定
2	草稿検討①
3	草稿検討②
4	理論的側面の精査
5	事例分析の方法と記述の精査
6	概念の整理と定義の再検討
7	論証の検討
8	引用・参考文献整備
9	図版の著作権などの確認
10	草稿完成提出
11	総合検討①
12	総合検討②
13	口頭試問模擬
14	最終的修正
15	完成稿の提出

科目名	文芸学・演劇学研究演習２	年次	1	単位数	4
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	団野　恵美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

各個人が学術的興味を抱いた領域の中で、テーマを設定し、修士論文を作成する。

授業概要

対面授業学術論文を書くための技術を身につけ、専門領域の中からテーマ選びをして、論文を仕上げるまでを指導する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

修士論文執筆の学生は、原稿チェックを受けながら論文の完成を目指すこと。1 年生は専門領域のテーマにそって、先行研究を調査し、その成果を発表できるようにすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題提出	70
授業内発表	30

教科書

教科書１	学生各々のテーマに応じて指導する		
出版社名		著者名	
教科書２			
出版社名		著者名	
教科書３			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名１			
出版社名		著者名	
参考書名２			
出版社名		著者名	
参考書名３			
出版社名		著者名	
参考書名４			
出版社名		著者名	
参考書名５			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	前期提出の論文について返却と講評
2	新しい視点と調査について
3	論文を仕上げるまでの計画
4	論文執筆しながらの研究について
5	論文チェックと指導
6	論文チェックと指導
7	論文チェックと指導
8	論文チェックと指導
9	論文チェックと指導
10	論文チェックと指導
11	論文チェックと指導
12	授業内で論文発表
13	論文チェックと指導
14	論文最終チェック
15	後期の論文提出

科目名	音楽学研究演習1	年次	1	単位数	4
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	津上　智実				
クラス名					

授業目的と到達目標

論文の書き方を学ぶ。音楽について書かれたものを読み、考え、書くというステップを通じて、自分が音楽のどのような側面に興味があるのかを明確にしていくことをめざす。

授業概要

論文を書くための基本的な考え方と方法を学ぶ。論文を真に有意義なものとするためには、自分が本当に興味の持てるテーマに出会うことが大切である。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

好奇心を発揮して、積極的に読んだり書いたり話したりすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業中課題（提出物、レポート）	30
参加度	20
授業中発表	20
期末レポート	30

教科書

教科書1	『論文ゼミナール』		
出版社名	東京大学出版会、2014	著者名	佐々木健一
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
音楽学の研究者が、多数の論考や学会発表をしてきた経験を活かして、音楽に関する論考を書く方法を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入
2	音楽について書くこと
3	テーマの考え方
4	主な音楽事典
5	文献を探す
6	インターネットを活用する
7	図書館を使う
8	楽譜を選ぶ
9	分析を考える
10	論の組み立て
11	学術的な文章とは
12	副論文を書くには
13	引用と文章のマナー
14	発表の形態
15	総括

科目名	音楽学研究演習2	年次	1	単位数	4
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	津上　智実				
クラス名					

授業目的と到達目標

論文の書き方を学ぶ。音楽について書かれたものを読み、考え、書くというステップを通じて、自分が音楽のどのような側面に興味があるのかを明確にしていくことをめざす。

授業概要

論文を書くための基本的な考え方と方法を学ぶ。論文を真に有意義なものとするためには、自分が本当に興味の持てるテーマに出会うことが大切である。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

好奇心を発揮して、積極的に読んだり書いたり話したりすること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業中課題（提出物、レポート）	30
参加度	20
授業中発表	20
期末レポート	30

教科書

教科書1	『論文ゼミナール』		
出版社名	東京大学出版会、2014	著者名	佐々木健一
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
音楽学の研究者が、多数の論考や学会発表をしてきた経験を活かして、音楽に関する論考を書く方法を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入
2	音楽について書くこと
3	テーマの考え方
4	主な音楽事典
5	文献を探す
6	インターネットを活用する
7	図書館を使う
8	楽譜を選ぶ
9	分析を考える
10	論の組み立て
11	学術的な文章とは
12	副論文を書くには
13	引用と文章のマナー
14	発表の形態
15	総括

科目名	絵画特殊研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	西田　眞人				
クラス名					

授業目的と到達目標

【前期】模写（手本は東洋の古典に限らず、世界の近・現代の絵画も含める）を通じて、各自で色や線、造形や絵画空間、様々な表現技法を探り鑑賞力、表現力を養う。

授業概要

前期】前半では共通課題「林潤一・寒牡丹（F10 号）」を模写。その間後半の各自模写手本を決定。5 回で各自の関心に応じて一点の模写制作。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

【前期】最初の共通課題で使用する日本画絵の具類は研究室で用意しますが、その後の課題は日本画以外の専攻学生は各自負担になります。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
【前期・後期】課題作品及び総合評価	100

教科書

教科書1	【前期】制作プロセスのカラー資料 20 枚は研究室で用意します。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	【前期】人気作家に学ぶ日本画の技法⑤花を描く　1994 年同朋舎出版		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

絵画特殊研究Ｉの前期・後期は、それぞれ授業内容・担当教員が異なり、それぞれ前期・後期で完結している。評価基準等も異なるので注意。

教員実務経験
前期】西田眞人　日本画家（公益社団法人日展特別会員） 日本画家の教員が多数の作品を制作発表してきた経験を活かし、日本画を描くための方法や技術を習得させる。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	前期】 1.【対面】前期授業内容のガイダンス
2	2.【対面】林潤一・寒牡丹（10 号）　下絵のトレース、骨描き
3	3.【対面】　〃　下地制作
4	4.【対面】　〃　彩色　適宜個別指導
5	5.【対面】　〃　彩色　適宜個別指導　次の課題についての指導
6	6.【対面】　〃　彩色　適宜個別指導　〃
7	7.【対面】　〃　彩色　適宜個別指導　〃
8	8.【対面】　〃　彩色　適宜個別指導　〃
9	9.【対面】　〃　彩色　適宜個別指導　〃
10	10・【対面】　〃　仕上げ　合評会及び次回からの各自選定手本模写についての確認
11	11.【対面】各自選定手本の制作。 適宜個別指導
12	12.【対面】各自選定手本の制作。 適宜個別指導
13	13.【対面】各自選定手本の制作。 適宜個別指導
14	14.【対面】各自選定手本の制作。 適宜個別指導
15	15.【対面】各自選定手本の制作。 適宜個別指導　合評会

科目名	絵画特殊研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	中川　知美				
クラス名					

授業目的と到達目標

「じぶんをまとめる」行為を起点に素材の偶発的な反応および意図的な操作をとおして造形行為がもたらす認識の変容を身体的に体験し、それにより従来の知覚が更新される契機を自らの制作活動として捉えなおす。

授業概要

素材間の予期せぬ相互作用を積極的に取り込み制作過程そのものを認識変容の場とする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

準備するもの
◯　自分で集めた「素材」
（古い布・紙・木片、道端で拾ったもの、壊れた工業製品など　。）
◯定着・接着剤
（木工用ボンド、アクリルジェルメディウムなど。）

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
研究の進展とその姿勢等の総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
美術家としての長年の制作・発表活動を通して培った豊富な経験を活かして指導する。
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	オリエンテーション授業の説明
2	並べて分類① 触発される媒体集めてスクラップする素材を集めて並べて分類する
3	並べて分類②
4	個別ミーティング① 各自が集めて来た素材を個別ミーティングにより制作の足がかりを探る
5	個別ミーティング②
6	支持体制作①
7	支持体制作②
8	支持体制作③
9	支持体制作④
10	支持体制作⑤
11	支持体制作⑥
12	支持体制作⑦
13	支持体制作⑧
14	支持体制作⑨
15	合評

科目名	絵画特殊研究3	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	いしだ ふみ				
クラス名	版画研究3				

授業目的と到達目標

版画の歴史と版による表現の特色を，作家研究と版画制作等の演習を通して学ぶこと。
様々な版種における版構造，および表現の特色の違いを理解する。

授業概要

現代版画の源は 20 世紀，自画・自刻・自摺りの「創作版画」と共に始まったといえるだろう。
この授業では、版を表現手段にしてきた作家の研究と様々な版画の制作を通して，「版」を使用することの意味や今後の自己の制作上に「版」をどのように生かすことが出来るかを考える機会とする。また相互鑑賞を随時取り入れ，自分の作品への客観的な視点をもてるようにする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

準備学修として，好きな版画家とその作品について資料を集めておく。
下絵が必要な版画制作の場合は予め準備する。
Adobe 社の ID を取得しておくこと。
スケッチブック（クロッキー帳）持参のこと。安全な制作，道具の片付け，作品の適切な保存に努める。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題提出作品、レポート	80
制作・相互鑑賞への姿勢，授業態度，授業への貢献度	20

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業の中で案内する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
受講人数制限有り。受講希望者は授業初日に出席する事。

教員実務経験
教員が版画作家としての経験を活かし、モノタイプ・シルクスクリーン等の表現技法を指導する。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	授業概要説明と 4 版種の説明
2	モノタイプ制作1
3	モノタイプ制作2
4	シルクスクリーン制作一版下作成
5	シルクスクリーン制作一製版
6	シルクスクリーン制作一印刷
7	シルクスクリーン制作一印刷
8	シルクスクリーン制作一印刷・改版
9	モノタイプ作品・シルクスクリーン作品鑑賞、合評
10	本学収蔵版画作品（浮世絵等）鑑賞
11	作家研究資料収集、発表資料準備
12	芸術を学ぶ者への問い
13	作家研究1一版画作品の中から関心を寄せる作家を選び、研究発表および協議
14	作家研究2一版画作品の中から関心を寄せる作家を選び、研究発表および協議
15	作家研究3一版画作品の中から関心を寄せる作家を選び、研究発表および協議

科目名	絵画特殊研究4	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	いしだ ふみ				
クラス名	版画研究4				

授業目的と到達目標

版画の歴史と版による表現の特色を，版画制作の演習を通して学ぶこと。
銅版画における版構造，および表現の特色の違いを理解する。

授業概要

現代版画の源は 20 世紀，自画・自刻・自摺りの「創作版画」と共に始まったといえるだろう。
この授業では銅版画の制作を通して，銅版画の版構造を理解すると主に，「版」を使用することの意味や今後の自己の制作上に「版」をどのように生かすことが出来るかを考える機会とする。また相互鑑賞を随時取り入れ，自分の作品への客観的な視点をもてるようにする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

下絵を予め準備する。
スケッチブック（クロッキー帳），銅板等は持参のこと。
安全な制作，道具の片付け，作品の適切な保存に努める。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題提出作品，レポート	80
制作・相互鑑賞への姿勢，授業態度，授業への貢献度	20

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業の中で案内する		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
受講人数制限有り。受講希望者は授業初日に出席する事。

教員実務経験
教員が版画作家としての経験を活かし、銅版画の表現技法を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	銅版画試作ー銅版準備，防食材塗布
2	銅版画試作ー間接法（描画・腐食）
3	銅版画試作ー間接法（エッチング・アクアチント・スピットバイト）
4	銅版画制作ー印刷
5	銅版画制作ー防食材塗布，版下転写
6	銅版画制作ー描画
7	銅版画制作ー腐食
8	銅版画制作ー描画と腐食
9	銅版画制作ー試刷1
10	銅版画制作ー加筆と腐食
11	銅版画制作ー加筆と腐食
12	銅版画制作ー試刷2，修正
13	銅版画制作ー本刷
14	銅版画作品鑑賞・合評1
15	銅版画作品鑑賞・合評2，授業の振り返りとまとめ

科目名	彫刻特殊研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	田丸 稔				
クラス名					

授業目的と到達目標

修了研究へ向けて、自らの彫刻的課題と関心に基づき、特に参考にするべき既成作家もしくは先行研究の作品を取り上げ、自らの表現に反映するための考察、試作を行い、修了研究の目的、到達目標を明確化する。

授業概要

創作の指標となる作家研究を通じて、制作の有り様を理解することを試みた上で新たに作品の試作を行い、彫刻観、制作観の構築を試みる。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

授業時間外は 1 週間 12 時間以上、自己の制作研究に集中し、理論的考察を試みる。
研究不正防止の観点から研究倫理(研究活動における不正行為：捏造、改ざん、盗用、研究データの管理など)に関することには特に留意すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
研究レポートおよびゼミナール形式の研究会における発表の状況に関する評価	50
学内外での研究発表(個展および展覧会等への出品)の状況についての評価	50

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	彫刻とは何か 新装版: 特質と限界		
出版社名	日貿出版	著者名	ハーバート・リード／宇佐美英治 訳
参考書名2	近代彫刻史		
出版社名	言叢社	著者名	ハーバート・リード／藤原えりみ 訳
参考書名3	芸術の意味		
出版社名	みすず書房	著者名	ハーバート・リード/滝口修造 訳
参考書名4	彫刻の美		
出版社名	中央公論美術出版	著者名	本郷新
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
彫刻家として、また芸術系大学で制作研究および教育活動を行ってきた経験を活かし、彫刻造形指導及び創作理念を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション
2	実制作およびレポート作成
3	実制作およびレポート作成
4	実制作およびレポート作成
5	実制作およびレポート作成
6	実制作およびレポート作成
7	実制作およびレポート作成
8	実制作およびレポート作成
9	実制作およびレポート作成
10	実制作およびレポート作成
11	実制作およびレポート作成
12	実制作およびレポート作成
13	実制作およびレポート作成
14	実制作およびレポート作成
15	まとめ

科目名	彫刻特殊研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	田丸　稔				
クラス名					

授業目的と到達目標

修了研究へ向けて、自らの彫刻的課題と関心に基づき、特に参考にするべき既成作家もしくは先行研究の作品を取り上げ、自らの表現に反映するための考察、試作を行い、修了研究の目的、到達目標を明確化する。

授業概要

前期に引き続き、創作の指標となる作家研究を通じて、制作の有り様を理解することを試みた上で新たに作品の試作を行い、彫刻観、制作観の構築を試みる。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

授業時間外は 1 週間 12 時間以上、自己の制作研究に集中し、理論的考察を試みる。
研究不正防止の観点から研究倫理(研究活動における不正行為：捏造、改ざん、盗用、研究データの管理など)に関することには特に留意すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
研究レポートおよびゼミナール形式の研究会における発表の状況に関する評価	50
学内外での研究発表(個展および展覧会等への出品)の状況についての評価	50

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	彫刻とは何か　新装版: 特質と限界		
出版社名	日貿出版	著者名	ハーバート・リード／宇佐美英治
参考書名2	近代彫刻史		
出版社名	言叢社	著者名	ハーバート・リード／藤原えりみ　訳
参考書名3	芸術の意味		
出版社名	みすず書房	著者名	ハーバート・リード/滝口修造　訳
参考書名4	彫刻の美		
出版社名	中央公論美術出版	著者名	本郷新
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
彫刻家として、また芸術系大学で制作研究および教育活動を行ってきた経験を活かし、彫刻造形指導及び創作理念を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション
2	実制作およびレポート作成
3	実制作およびレポート作成
4	実制作およびレポート作成
5	実制作およびレポート作成
6	実制作およびレポート作成
7	実制作およびレポート作成
8	実制作およびレポート作成
9	実制作およびレポート作成
10	実制作およびレポート作成
11	実制作およびレポート作成
12	実制作およびレポート作成
13	実制作およびレポート作成
14	実制作およびレポート作成
15	まとめ

科目名	彫刻特殊研究3	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	本多　紀朗				
クラス名					

授業目的と到達目標

学部に於ける基礎的な制作研究を基に、実際に作品を設置することをシミュレーションして一歩進んだ、広い視野に立った研究を進めることを目的とする。

授業概要

既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者について論評をする。それを踏まえ、自分自身の作品に置き換えてモニュメント設置までのシュレーションを想定し、制作の意思と意向、素材への検討等を考えデッサン、エスキース等の制作を行う。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

目的意識を持った受講態度で望む。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
提出課題の評価	80
受講態度	20

教科書

教科書1	なし		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	なし		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
本多紀朗 彫刻家の教員が、数多くの制作発表と社会活動を行ってきた経験を活かし、造形力と表現力を修得させる。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	授業の説明。既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察する。
2	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
3	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
4	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
5	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
6	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
7	作品の制作及び設置などの経過。
8	作品の制作及び設置などの経過。
9	作品の制作及び設置などの経過。
10	作品の制作及び設置などの経過。
11	作品の制作及び設置などの経過。
12	設置作例の具体的状況の検証。
13	設置作例の具体的状況の検証。
14	設置作例の具体的状況の検証。
15	設置作例の具体的状況の検証。

科目名	彫刻特殊研究4	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	本多　紀朗				
クラス名					

授業目的と到達目標

学部に於ける基礎的な制作研究を基に、実際に作品を設置することをシミュレーションして一歩進んだ、広い視野に立った研究を進めることを目的とする。

授業概要

既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者について論評をする。それを踏まえ、自分自身の作品に置き換えてモニュメント設置までのシュレーションを想定し、制作の意思と意向、素材への検討等を考えデッサン、エスキース等の制作を行う。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

目的意識を持った受講態度で望む。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
提出課題の評価	80
受講態度	20

教科書

教科書1	なし		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	なし		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
本多紀朗 彫刻家の教員が、数多くの制作発表と社会活動を行ってきた経験を活かし、造形力と表現力を修得させる。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	設置作例の具体的状況の検証。
2	設置作例の具体的状況の検証。
3	設置作例の具体的状況の検証。
4	制作の意思、意向など時には制作の依頼など色々な場合の検証。
5	制作の意思、意向など時には制作の依頼など色々な場合の検証。
6	現場（場所）の調査、確認。
7	現場（場所）の調査、確認。
8	素材の検討（素材の特徴、表現の自由度、メンテナンスの問題）
9	素材の検討（素材の特徴、表現の自由度、メンテナンスの問題）
10	形態から形体。
11	設置（据付）取り付けに係わる問題点。
12	提案（プレゼンテーション）の想定を前提に。デッサン。
13	提案（プレゼンテーション）の想定を前提に。現場写真。
14	提案（プレゼンテーション）の想定を前提に。エスキース（プランとデッサン）提案
15	提案（プレゼンテーション）の想定を前提に。エスキース（プランとデッサン）決定

科目名	デザイン特殊研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	大平　弘				
クラス名					

授業目的と到達目標

ビジュアルコミュニケーションを目的としたグラフィックデザインは、メディア・社会環境によって手法や技術が変化します。各自の研究課題を基本におき、完成度の高い作品制作を目的にします。感覚的造形表現（独自性）とビジュアルコミュニケーションの関係を考察し、計画的な考え方やアイデアを探り、豊かな感性と個性で表現するグラフィックデザイナー・イラストレーターの育成を目標にします。

授業概要

展覧会を題材にグラフィックデザインを考察し、制作する。
①『本の形』展に出品する［本］の制作
②『本の形』展の告知ポスター制作＿B1 サイズ

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

前期は出品作［本］の制作と告知ポスター制作が中心になります。後期は展覧会会場の作品展示計画に移行しますので、現開催されている展覧会に分野をとわず足をはこび、どのような形で展示がおこなわれているのか、必要なグラフィックが制作されているのかを確認しておいてください。
前期作品は後期作品とまとめファイル提出をしてもらいますので、データ類は無くさないようにしてください。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
受講態度・積極的研究参加	50
制作課題による評価	50

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
グラフィックデザイナーの実務と造形作家としての視点から、作品制作の方法や視覚伝達の技術を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	課題説明 ①『本の形』展に出品する[本]の制作 ②『本の形』展の告知ポスター制作＿B1 サイズ
2	資料収集＿見つける・調べる 既存の本の形にとらわれることなく、[本]を考えてみる。
3	資料収集＿見つける・調べる
4	本の試作＿検討・深める 素材の検討
5	本の試作＿改良・考えをまとめる 各自の専門性を活かした表現を考えてみる。 素材の検討
6	本の試作＿改良・考えをまとめる 表現技法の検討
7	完成作品制作（報告＿検討）
8	完成作品制作（報告＿検討）
9	完成作品制作（報告＿検討・改善）
10	本の完成／展示／合評
11	本の完成作品を使って告知ポスターの制作 撮影：ポスターの素材として客観視する。作品の魅力を探る。
12	本の完成作品を使って告知ポスターの制作撮影した画像の選択、画像持参すること。 レイアウト案の作成（試作 B2 サイズ）
13	本の完成作品を使って告知ポスターの制作 レイアウト案の作成（試作 B2 サイズ）
14	本の完成作品を使って告知ポスターの制作 レイアウトの試作（試作 B2 サイズ）
15	『本の形』展　展覧会前期／展覧会で最終提出（①②）となります／合評 ①　　課題＿『本の形』展出品作品制作＿本 ②　　課題＿B1 サイズ展覧会告知ポスター 後期 ③　　課題＿展示計画（入口看板・サイン計画含む） ④　　課題＿会場配布用 ZINE

科目名	デザイン特殊研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	大平　弘				
クラス名					

授業目的と到達目標

ビジュアルコミュニケーションを目的としたグラフィックデザインは、メディア・社会環境によって手法や技術が変化します。各自の研究課題を基本におき、完成度の高い作品制作を目的にします。感覚的造形表現（独自性）とビジュアルコミュニケーションの関係を考察し、計画的な考え方やアイデアを探り、豊かな感性と個性で表現するグラフィックデザイナー・イラストレーターの育成を目標にします。

授業概要

『本の形』展指定した会場に必要な導線を考えたサイン計画、作品展示（案）、サイン計画などを制作する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

各自の研究分野をもとに授業の組み立てをします。制作は各自の感覚的表現から始まるものですが、その視野を広げることは制作を続けるためにとても大切です。美術を含む他造形表現、画材、材料、技法にめをくばり表現の幅を広げるように心がけてください。さらに、多くの展覧会に足を運び、展示方法・会場風景も観察の対象としてください。合わせて「展覧会」に関わるポスター・チラシ、ダイレクトメール、冊子などを収集しておいてください。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
受講態度・積極的研究参加	50
制作課題による評価	50

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
グラフィックデザイナーの実務と造形作家としての視点から、作品制作の方法や視覚伝達の技術を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	後期／課題説明 ①　　課題＿展示計画（入口看板・サイン計画含む） ②　　課題＿会場配布用＿ZINE の制作
2	資料収集＿見つける・調べる 空間の確認（指定教室の実寸確認）、資料収集
3	展示方法を検討する＿展示会場のサイズを確認する ZINE の試作＿検討 サイズと形態、紙・素材の検討
4	展示方法を検討する ZINE の試作＿検討・深める レイアウト案の作成
5	展示計画を検討する ZINE の試作＿改良・考えをまとめる レイアウトの確認／●実寸サイズの試作プレゼンテーション
6	展示計画を検討する／サイン計画資料収集 作品制作（報告）
7	サイン計画資料収集 作品制作（報告）
8	サイン計画・ZINE 制作（報告）
9	サイン計画・ZINE 制作（報告＿検討）
10	サイン計画・ZINE 制作（報告＿改善）
11	ZINE の完成／プレゼンテーション／合評
12	展示計画・サイン計画をまとめる１
13	展示計画・サイン計画をまとめる２
14	展示計画・サイン計画をまとめる３
15	『本の形』展　展覧会　前期・後期の作品展示 前期 ①　　課題＿『本の形』展出品作品制作＿本 ②　　課題＿B1 サイズ展覧会告知ポスター 後期 ③　　課題＿展示計画（入口看板・サイン計画含む） ④　　課題＿会場配布用 ZINE ①～④を A4 ファイルにまとめ提出

科目名	デザイン特殊研究3	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	福武　徹				
クラス名					

授業目的と到達目標

本授業では、ユーザーインターフェース（UI）およびユーザーエクスペリエンス（UX）デザインの基礎的な考え方を学び、ユーザー体験を設計する視点から課題発見および改善提案を行うための方法を習得することを目的とする。
また、Figma を用いた簡易的なプロトタイピングを通じて、研究活動における成果物の可視化やプレゼンテーションに活用可能な UI 設計手法の基礎を身につける。
本授業の履修を通じて、以下の到達を目指す。

- UI/UX デザインの基本概念を理解する
- 日常的なサービスやプロダクトの体験を分析する視点を身につける
- 情報構造を整理し、視覚的に表現する基礎的な方法を習得する
- Figma を用いて簡易なワイヤーフレームやプロトタイプを作成できるようになる

授業概要

本授業では、UI/UX デザインの基本概念および体験設計のプロセスを学び、日常生活におけるサービスやプロダクトを対象とした課題分析と改善提案を行う。
近年、デザインの対象は製品やグラフィックにとどまらず、サービスやシステムの利用体験そのものへと拡張している。本授業では、こうした体験設計の考え方を基礎から理解するとともに、Figma を用いたプロトタイピングを通じて、UI の構造を可視化する手法を実践的に学ぶ。
本研究の進行に配慮し、授業内での演習を中心とした構成とする。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

- 授業ではノートパソコンを使用するため、毎回必ず持参すること。
- 授業内での演習を中心に進めるため、授業時間内での作業に積極的に取り組むこと。
- 授業外においても簡単な振り返りや修正作業を行うことが望ましい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
スキル習熟度判定	40
課題提出状況	60

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	UX デザインを始める本		
出版社名	株式会社翔泳社	著者名	玉飼真一 (著), 村上竜介 (著), 佐藤哲 (著), 太田文明 (著), 常盤晋作 (著)
参考書名2			

出版社名		著者名	
参考書名３			
出版社名		著者名	
参考書名４			
出版社名		著者名	
参考書名５			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

担当教員は HCD-Net 認定の人間中心設計専門家であり、UX デザインの実務経験豊富なプロフェッショナルです。通信機器やアプリのデザインにおいて培った実務経験を活かし、本授業では理論だけでなく、実際の製品開発プロセスに沿った実践的なスキルを学びます。授業を通して、学生はユーザー研究、プロトタイピングなど、ユーザー中心のデザインプロセス全般に関わる技術を学び、実際のプロジェクトに応用する力を養うことを目指します。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	ガイダンス／UI・UX デザインの基礎概念
2	UI・UX デザインの基礎
3	テーマ設定と企画立案 1
4	テーマ設定と企画立案 2 企画の練り込み
5	ユーザー体験の設計 ペルソナ、シナリオ、カスタマージャーニーマップ
6	ユーザー体験の設計 ペルソナ、シナリオ、カスタマージャーニーマップ
7	画面設計 1
8	画面設計 2
9	プロトタイピング
10	ユーザーテスト
11	中間発表
12	UI 改善
13	最終デザインの作成
14	最終デザインの作成
15	最終発表

科目名	デザイン特殊研究4	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	石津　勝				
クラス名	大学院				

授業目的と到達目標

展示という観点から自身の研究テーマに沿った中で作品制作を行い、学内に止まらず学外に発表の場を設けることで、より社会に近づいた研究へとフィードバックできることを目的とする。あくまで自身の研究へ役立てることを常に意識しながらも、他領域や異分野への視野も獲得できるように心掛ける。

授業概要

受講者自身の研究課題の確立に役立つことを最優先し、課題設定からデザインの方向性の確立、最終的に展示空間を意識した課題作品の発表へと繋げる。そして受講者たち自身が企画する学外での発表の場を設ける。また、関連したコンペ等があれば、それらに応募することも積極的に推奨する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

課題制作の内容については教員の確認をとること。適時プリントを配布するので、事前に必要な予習を行い、必要な準備物も用意すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
提出された課題作品及び主体的な授業参加を総合的に評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
空間デザイナーである教員が、多数の展示設計の実務経験を活かし、実践的な場面を想定した展示デザインに関わる指導を行う。
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	課題のテーマ設定／課題設定のための調査・分析
2	設定テーマの調査・分析から企画・構想（6W2H）
3	企画・構想（アイデアからデザインの方向性決定）
4	表現内容のシナリオ設定
5	シナリオからコンセプトワーク
6	コンセプトに沿った計画・設計（PDCAサイクル）
7	コンセプトに沿った計画・設計（PDCAサイクル）
8	コンセプトに沿った計画・設計（PDCAサイクル）
9	表現内容(課題作品)作成
10	表現内容(課題作品)作成
11	表現内容(課題作品)作成
12	表現内容(課題作品)ブラッシュアップ
13	表現内容(課題作品)ブラッシュアップ
14	表現内容(提出課題)提出　※受講者の発表の場を設定
15	講評／授業のまとめ

科目名	デザイン特殊研究5	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	道田 健				
クラス名					

授業目的と到達目標

研究テーマは人と社会の間にある課題を探し出し、改善することでより良い暮らしにしていくプロセスに焦点を当てること。プロダクトデザインは人が何かを実現するために常に貢献してきたが、結果だけにとらわれず、絶え間なく変化する周辺環境の中で柔軟な解決策を提示できるような思考を養っていく。

授業概要

自身の研究テーマに合わせた、プロトタイプの制作を行う。製品デザインが、背景、ターゲット、マテリアル、細かな目的によって変化することを体験する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
【道田　健】 楽器メーカーのプロダクトデザイン部門に勤務後、独立してプロダクトデザイナーとして製品デザインや地場産業での商品開発、企業のデザインコンサルティングなどを行う。 受賞歴：G マーク、レッドドットデザイン賞、IF デザイン賞など。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス、 授業の進め方、 各自の専門領域のヒヤリング、
2	課題テーマ、 リサーチの手法と進め方①
3	リサーチの手法と進め方②
4	過去の事例探し、
5	目的、社会背景、ペルソナ　①
6	目的、社会背景、ペルソナ　②
7	目的、社会背景、ペルソナ　③
8	リサーチのまとめ
9	コンセプトを可視化する
10	製品の条件と仕様①
11	製品の条件と仕様②
12	プロトタイプ制作①
13	プロトタイプ制作②
14	仮説の検証
15	まとめと振り返り

科目名	デザイン特殊研究6	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	道田　健				
クラス名					

授業目的と到達目標

研究テーマは人と社会の間にある課題を探し出し、改善することでより良い暮らしにしていくプロセスに焦点を当てること。プロダクトデザインは人が何かを実現するために常に貢献してきたが、結果だけにとらわれず、絶え間なく変化する周辺環境の中で柔軟な解決策を提示できるような思考を養っていく。前期の研究を踏まえて後期はより具体的な改善方法を探ってゆく。

授業概要

大学院での研究テーマに合わせて、調査をまとめ、仮設の検証を行うためのプロトタイプ制作などを実践していく。後期はプロトタイプの制作を通しての検証作業に重点を置く。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

研究内容については教員と相談、確認をとって進めること。毎回の授業には、調べたこと、研究したことを他人に見せる書式にまとめて来ること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
取組みと研究成果を見て総合的に判断します。	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	テーマ探しとリサーチ①
2	テーマ探しとリサーチ②
3	社会課題について
4	テーマと社会課題のすり合わせ
5	ストーリーボード①
6	ストーリーボード②
7	マテリアル研究①
8	マテリアル研究②
9	ユーザーにとっての価値を考える
10	製品デザインが環境から受ける影響について
11	プロトタイプ制作①
12	プロトタイプ制作②
13	プロトタイプ制作③
14	仮説の検証、改善点の確認
15	まとめと展望

科目名	写真特殊研究 1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	青山 勝				
クラス名					

授業目的と到達目標

【写真とテクスト】W・F・H・トルボット『自然の鉛筆』(1844-46)以来、無数の「写真集」が出版されてきました。写真集は今日では、「自立的な芸術形態」として捉えられるようになってきています。この授業(写真特殊研究 1)では、写真と言葉(キャプション/テクスト)の関係についていくつかのワークを重ねながら個々の考察を深めていきます。
写真表現・言語表現・デザイン等の領域を横断する創造的活動を通じて、建学の精神にある「創造性の奨励」「自由の精神の徹底」「総合のための分化と境界領域の開拓」等の理念を追求します。

授業概要

具体的にいくつかの写真集を手に取ってもらいながら双方向的に授業を進めます。また、いくつかの課題を出しますので、自由な発想で取り組んみ、ディスカッションや合評にも積極的に参加・介入してください。

準備学修(予習・復習)・受講上の注意

写真撮影等に関する専門的な知識やスキルを前提とする授業ではありません。課題提出だけでなく、合評への参加(積極的な発言)を重視します。下記の授業計画は暫定的なものであり、受講生の関心や状況に応じて変更する場合があります。

成績評価方法・基準

種別	割合(%)
平常点(授業への貢献度)	30
授業内口頭発表	30
課題の内容	40

教科書

教科書1	特になし。必要に応じてプリント等を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	『自然の鉛筆』		
出版社名	赤々舎	著者名	W・H・F・トルボット / 青山勝(訳)
参考書名2	『さすらい』		
出版社名	赤々舎	著者名	レイモン・ドゥパルドン / 青山勝(共訳)
参考書名3	『抗体』		
出版社名	赤々舎	著者名	アントワーヌ・ダガタ / 青山勝(共訳)
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	イントロダクション：授業趣旨・スケジュールの説明など
2	自分の作品（写真等）について口頭発表する（1）
3	自分の作品（写真等）について口頭発表する（2）
4	【第 1 課題】自分が撮影した 1 枚の写真にタイトルとテクストをつける（1）
5	【第 1 課題】自分が撮影した 1 枚の写真にタイトルとテクストをつける（2）
6	【第 1 課題】自分が撮影した 1 枚の写真にタイトルとテクストをつける（3）
7	【第 1 課題】振り返り
8	【第 2 課題】与えられた 1 枚の写真にタイトルとテクストをつける（1）
9	【第 2 課題】与えられた 1 枚の写真にタイトルとテクストをつける（2）
10	【第 2 課題】与えられた 1 枚の写真にタイトルとテクストをつける（3）
11	【第 2 課題】振り返り
12	【第 3 課題】複数の写真を使ってシークエンスを作り、タイトルとテクストをつける（1）
13	【第 3 課題】複数の写真を使ってシークエンスを作り、タイトルとテクストをつける（2）
14	【第 3 課題】複数の写真を使ってシークエンスを作り、タイトルとテクストをつける（3）
15	全体の振り返り

科目名	写真特殊研究２	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	青山　勝				
クラス名					

授業目的と到達目標

【写真集をつくる】W・F・H・トルボット『自然の鉛筆』（1844-46）以来、無数の「写真集」が出版されてきました。写真集は今日では、「自立的な芸術形態」として捉えられるようになってきています。この授業（写真特殊研究２）では、複数の写真と言葉（タイトルやテクスト）の組み合わせ（編集）によって構成される簡素な写真集の制作に取り組みます。
写真表現・言語表現・デザイン等の領域を横断する創造的活動を通じて、建学の精神にある「創造性の奨励」「自由の精神の徹底」「総合のための分化と境界領域の開拓」等の理念を追求します。

授業概要

具体的にいくつかの写真集を紹介しつつ双方向的に授業を進めます。受講生各人のテーマにしたがって、また各人の専門スキルを活かしながら写真集の製作を進めていきます。新しい試みに挑む機会にしてください。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

写真撮影や製本に関する専門的な知識やスキルを前提とする授業ではありません。課題提出だけでなく、合評への参加（積極的な発言）を重視します。下記の授業計画は暫定的なものであり、受講生の関心や状況に応じて変更する場合があります。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
平常点（授業への貢献度）	30
授業内口頭発表	30
課題の内容	40

教科書

教科書１	特になし。必要に応じてプリント等を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書２			
出版社名		著者名	
教科書３			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名１	『自然の鉛筆』		
出版社名	赤々舎	著者名	W・H・F・トルボット　／　青山勝（訳）
参考書名２	『さすらい』		
出版社名	赤々舎	著者名	青山勝（共訳）
参考書名３	『抗体』		
出版社名	赤々舎	著者名	アントワーヌ・ダガタ　／　青山勝（共訳）
参考書名４			
出版社名		著者名	
参考書名５			

出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	イントロダクション：授業趣旨・スケジュールの説明など
2	写真集の企画を口頭発表する（1）
3	写真集の企画を口頭発表する（2）
4	写真集の企画を口頭発表する（3）
5	中間発表（写真の選択、タイトル、テクスト）（1）
6	中間発表（写真の選択、タイトル、テクスト）（2）
7	中間発表（写真の選択、タイトル、テクスト）（3）
8	中間発表（写真の選択、タイトル、テクスト）（4）
9	中間発表（レイアウト、製本計画等）（1）
10	中間発表（レイアウト、製本計画等）（2）
11	中間発表（レイアウト、製本計画等）（3）
12	中間発表（レイアウト、製本計画等）（4）
13	作品仮提出
14	合評（1）
15	合評（2）と課題作品の最終提出

科目名	工芸特殊研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	三木　陽子				
クラス名					

授業目的と到達目標

やきものの制作プロセスを通じて、必要とされる基礎的知識と技法を、実際の制作を通じて習得する。
また古代から人の生活を支え、芸術や文化を担ってきた歴史あるやきものに触れることにより、受講生が新たな視点を獲得し、自身の研究を深めることを目指す。

授業概要

前期：代表的な 3 種の技法、手びねり技法、タタラ技法、鋳込み技法を用いた基礎的な課題を行うことで、素材への理解を深め、体感する。
後期：前期で学んだ技法を用い、自身の研究と関連する作品を制作する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

やきものの要となる焼成に向けて、受講生全員の制作進行を合わせなければならない為、できるだけ出席すること。
受講中は制作に適した服装で臨んでください。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
作品	70
授業に取り組む姿勢	30

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

{担当教員：三木陽子 website,http://www.mikiyoko.com}
特記事項
シラバスについて： 履修者の人数や経験や状況に応じ、内容が一部変更になる可能性があります。
教員実務経験
陶芸作家・造形作家としての活動や経験を活かした指導を行う。
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	授業概要、陶磁器制作プロセス説明 講義：教員（三木陽子）研究プレゼンテーション（自作について）
2	触覚体験：土練り、掌中のオブジェ制作（講義と実習）
3	受講生による研究プレゼンテーション（人数により回数変更有り）
4	受講生による研究プレゼンテーション（人数により回数変更有り）
5	制作 A「筒型を基本とした造形」 手びねり技法による制作
6	制作 A「筒型を基本とした造形」 触覚による加飾・仕上げ→乾燥
7	制作 B：「箱型を基本とした造形」 タタラ板を利用した粘土板制作・型紙制作
8	制作 B：「箱型を基本とした造形」 粘土板組み立て
9	制作 B：「箱型を基本とした造形」 仕上げ→乾燥
10	制作 C：1 面型による鋳込み成形 原型制作
11	制作 C：1 面型による鋳込み成形 原型制作→石膏型制作
12	制作 C：1 面型による鋳込み成形 ・石膏型制作 ・制作 A.B:素焼き（窯詰め）
13	制作 C：1 面型による鋳込み成形 石膏型の仕上げ（鋳込みは後期） ・制作 A.B:素焼き（窯出し）
14	制作 A.B:釉掛け 本焼成窯詰め
15	本焼成窯出し・講評

科目名	工芸特殊研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	三木　陽子				
クラス名					

授業目的と到達目標

やきものの制作プロセスを通じて、必要とされる基礎的知識と技法を、実際の制作を通じて習得する。
また古代から人の生活を支え、芸術や文化を担ってきた歴史あるやきものに触れることにより、受講生が新たな視点を獲得し、自身の研究を深めることを目指す。

授業概要

前期：代表的な 3 種の技法、手びねり技法、タタラ技法、鋳込み技法を用いた基礎的な課題を行うことで、素材への理解を深め、体感する。
後期：前期で学んだ技法を用い、自身の研究と関連する作品を制作する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

やきものの要となる焼成に向けて、受講生全員の制作進行を合わせなければならない為、できるだけ出席すること。
受講中は制作に適した服装で臨んでください。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
作品	70
授業に取り組む姿勢	30

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

{担当教員：三木陽子 website,http://www.mikiyoko.com}
特記事項
シラバスについて：履修者の人数や経験や状況に応じ、内容が一部変更になる可能性があります。
教員実務経験
陶芸作家・造形作家としての活動や経験を活かした指導を行う。
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	講義：「現代の陶芸」
2	・鋳込み成形の続き ・最終課題のプランニング
3	・鋳込み成形の続き ・最終課題のプランニング
4	・鋳込み成形の仕上げ ・最終課題のプランニング
5	・最終課題のプランニング ・成形開始
6	最終課題の成形
7	最終課題の成形
8	最終課題の成形と仕上げ
9	窯詰め（素焼き）
10	・窯出し ・加飾
11	加飾
12	施釉
13	窯詰め（本焼き）
14	窯出し
15	講評会

科目名	工芸特殊研究3	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	釜本　幸治				
クラス名					

授業目的と到達目標

鋳金、鍛金、彫金など金工の技法に触れ、金属素材のについての基礎知識と基礎技術の習得を目的とする。

授業概要

金属板を金鎚や木槌で叩いて加工する鍛金技法により作品制作を行います。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

金属工芸では制作にあたって専門機具や薬品、火気等を使用します。必ず作業に適した服装を着用して下さい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
制作作品	60
制作姿勢	40

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

金工家として作品制作や発表の経験を活かした指導を行います。	

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	課題説明
2	作品構想・アイディアチェック
3	鍛金作業
4	鍛金作業
5	鍛金作業
6	鍛金作業
7	鍛金作業
8	鍛金作業
9	鍛金作業
10	鍛金作業
11	鍛金作業
12	鍛金作業
13	仕上げ
14	仕上げ
15	合評

科目名	工芸特殊研究4	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	釜本　幸治				
クラス名					

授業目的と到達目標

鋳金、鍛金、彫金など金工の技法に触れ、金属素材のについての基礎知識と基礎技術の習得を目的とする。

授業概要

アルミニウムを素材に鋳造作品を制作します。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

金属工芸では制作にあたって専門機具や薬品、火気等を使用します。
必ず作業に適した服装を着用して下さい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
制作作品	60
制作姿勢	40

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

金工家として作品制作や発表の経験を活かした指導を行います。	

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	課題説明
2	作品構想・アイデアチェック
3	鋳造原型制作
4	鋳造原型制作
5	鋳造原型制作
6	鋳造原型制作
7	鋳型制作
8	鋳型制作
9	鋳型制作
10	鋳造
11	鋳造
12	仕上げ
13	仕上げ
14	仕上げ
15	合評

科目名	工芸特殊研究5	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	舘　正明				
クラス名					

授業目的と到達目標

染織には布を染める「染め」と、糸を織る「織り」がある。多くの場合、そのどちらにも染色の工程が介在しているが、染色は染めるだけでは成立しない。その対極にある染めない部分をいかに作るかが重要であり、これを防染と言う。防染を行うには様々なプロセス、素材や技法を必要とする。この授業では素材や技法との対話やプロセスで生まれる新しい染色表現の探求を目的とし、建学の精神の国際的視野に立っての展開に基づき、伝統の形式に囚われることなく、染色分野の理解と各自の専門分野への新しいアプローチの発見と新しい芸術の伝統の展開を目標とする。

授業概要

防染に用いられる素材の代表である蠟に注目し、それぞれの特性や技法などを演習によって体験し、各自の作品へ展開する。
また、現代の染織作品や染織界の動向などについて適宜、資料などで紹介する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

身の回りに溢れる染織品に目を向け、染織分野と人との密接さを感じて欲しい。新しいもの、古いもの、専門分野の枠にとらわれず美術館、ギャラリーへ出向き、視野を広げること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
提出課題・作品	70
プレゼンテーション	30

教科書

教科書1	適宜資料等を配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	染を学ぶ		
出版社名	角川書店	著者名	福本繁樹・柳楽剛・舘正明他
参考書名2	21 世紀は工芸がおもしろい		
出版社名	求龍堂	著者名	福本繁樹編著
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL
{舘 正明 HP,https://tatemasaaki.jimdofree.com/}

特記事項

教員実務経験
染色家の教員が制作、発表で得た知見を生かし染色表現の技法について指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	授業説明、担当教員によるプレゼンテーション
2	受講生によるプレゼンテーション
3	布を染める1 準備　布を張る　道具の使い方　地入れ
4	布を染める2 染色　染料の特性を知る
5	布を染める3 仕上げ　蒸し
6	布を染める４ 仕上げ　水元
7	ろうによる防染を考える1 講義　ろう染めについて
8	ろうによる防染を考える2 染色　染料の滲みを生かして
9	ろうによる防染を考える3 防染　ろうを置く
10	ろうによる防染を考える4 仕上げ　脱ろうソーピング
11	技法研究1-1 バティック　試作・デザイン
12	技法研究1-2 バティック　ろう置き
13	技法研究1-3 バティック　藍染め
14	技法研究1-4 バティック　仕上げ　脱ろうソーピング
15	合評

科目名	工芸特殊研究6	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	舘　正明				
クラス名					

授業目的と到達目標

染織には布を染める「染め」と、糸を織る「織り」がある。多くの場合、そのどちらにも染色の工程が介在しているが、染色は染めるだけでは成立しない。その対極にある染めない部分をいかに作るかが重要であり、これを防染と言う。防染を行うには様々なプロセス、素材や技法を必要とする。この授業では素材や技法との対話やプロセスで生まれる新しい染色表現の探求を目的とし、建学の精神の国際的視野に立っての展開に基づき、伝統の形式に囚われることなく、染色分野の理解と各自の専門分野への新しいアプローチの発見と新しい芸術の伝統の展開を目標

授業概要

防染に用いられる素材の代表である糊に注目し、それぞれの特性や技法などを演習によって体験し、各自の作品へ展開する。
また、現代の染織作品や染織界の動向などについて適宜、資料などで紹介する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

身の回りに溢れる染織品に目を向け、染織分野と人との密接さを感じて欲しい。新しいもの、古いもの、専門分野の枠にとらわれず美術館、ギャラリーへ出向き、視野を広げること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
提出課題・作品	70
プレゼンテーション	30

教科書

教科書1	適宜資料等を配布		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	染を学ぶ		
出版社名	角川書店	著者名	福本繁樹・柳楽剛・舘正明他
参考書名2	21 世紀は工芸がおもしろい		
出版社名	求龍堂	著者名	福本繁樹編著
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL
{舘 正明 HP,https://tatemasaaki.jimdofree.com/}
特記事項

教員実務経験
染色家の教員が制作、発表で得た知見を生かし染色表現の技法について指導する。
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	糊による防染を考える1 講義　型染めについて
2	糊による防染を考える2 糊置き
3	糊による防染を考える3 地入れ技法研究2-1筒描き　試作・デザイン
4	糊による防染を考える4 染色
5	糊による防染を考える5 染料定着、糊落し
6	技法研究2-2 筒描き　糊置き
7	技法研究2-3 筒描き　染色
8	技法研究2-4 筒描き　仕上げ　糊落し・水元
9	合評防染による染色布の制作1 染色作品制作に向けての計画発表
10	防染による染色布の制作 2 各自の計画により制作を進める
11	防染による染色布の制作 3 各自の計画により制作を進める
12	防染による染色布の制作 4 各自の計画により制作を進める
13	防染による染色布の制作 5 各自の計画により制作を進める
14	防染による染色布の制作 6 各自の計画により制作を進める
15	プレゼンテーション・合評

科目名	工芸特殊研究7	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	木下　良輔				
クラス名					

授業目的と到達目標

ガラス工芸についての基本理解とガラス技法の体験学習を通して、各学生の専門領域とガラスとの新たな関わりを模索する。幅広くガラスについての知識を得るとともに、グローバルな考えを持って活躍の場が広がることを期待する。

授業概要

ガラス素材の歴史的変遷、技法、それに伴う機械や設備、道具と材料等々について、演習を通して理解する。各自の専門領域に基づく新たなガラスの提案を形にし、展示発表を行う。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

素材としてのガラスの特徴をとらえることに最大限の関心を持つこと。既成の概念と常識にとらわれずに、自分の感性でガラスを感じて欲しい。考察レポート作成のためのスケッチや記録撮影を随時行うこと。第 15 回の考察記録の提出とプレゼンテーション、及び、第 30 回の作品展示発表とプレゼンテーションは必修。材料費が必要となります。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
プレゼンテーション	25
レポート	25
提案作品	25
受講姿勢	25

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	コールドワークテキスト		
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編
参考書名2	パート・ド・ヴェールの技法		
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編
参考書名3	世界ガラス工芸史		
出版社名	美術出版社	著者名	中山公男
参考書名4	吹きガラステキスト		
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
ガラス造形作家

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス／年間授業説明
2	教員と指導スタッフによるプレゼンテーション
3	履修者のプレゼンテーション
4	体験授業1　ホットワーク1
5	体験授業2　ホットワーク2
6	体験授業3　バーナーワーク
7	体験授業4　キルンワーク1
8	体験授業５　キルンワーク２
9	体験授業６　キルンワーク３
10	体験授業7　コールドワーク1
11	体験授業8　コールドワーク2
12	体験授業9　コールドワーク3
13	作業予備日
14	作業予備日
15	前期講評会　／　課題提出日

科目名	工芸特殊研究8	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	木下　良輔				
クラス名					

授業目的と到達目標

ガラス工芸についての基本理解とガラス技法の体験学習を通して、各学生の専門領域とガラスとの新たな関わりを模索する。幅広くガラスについての知識を得るとともに、グローバルな考えを持って活躍の場が広がることを期待する。

授業概要

ガラス素材の歴史的変遷、技法、それに伴う機械や設備、道具と材料等々について、演習を通して理解する。各自の専門領域に基づく新たなガラスの提案を形にし、展示発表を行う。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

素材としてのガラスの特徴をとらえることに最大限の関心を持つこと。既成の概念と常識にとらわれずに、自分の感性でガラスを感じて欲しい。考察レポート作成のためのスケッチや記録撮影を随時行うこと。第 15 回の考察記録の提出とプレゼンテーション、及び、第 30 回の作品展示発表とプレゼンテーションは必修。材料費が必要となります。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
プレゼンテーション	25
レポート	25
提案作品	25
受講姿勢	25

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	コールドワークテキスト		
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編
参考書名2	パート・ド・ヴェールの技法		
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編
参考書名3	世界ガラス工芸史		
出版社名	美術出版社	著者名	中山公男
参考書名4	吹きガラステキスト		
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験	
ガラス造形作家	

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	後期課題説明
2	個別指導
3	後期課題プレゼンテーション1
4	後期課題プレゼンテーション2
5	制作
6	制作
7	制作
8	制作
9	中間発表
10	制作
11	制作
12	制作
13	制作
14	後期講評会
15	課題提出日

科目名	文学創作特殊研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	玄 月				
クラス名					

授業目的と到達目標

タイプの違ういくつかの短編小説の構造分析を行い、文体、構成を研究する。批評眼を養う。

授業概要

これまで漫然と読んできたであろう小説から、視点、文体、構成、長所、欠点、作者の癖などを洗い出し、詳しく分析する。
そこで得た「小説の技法」を元に、受講生各自が既存の短編の構造分析を行う。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

読む・書くだけでなく、人の話をよく聞き、理解すること。指定された本は精読すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題はすべて提出。主体的な授業参加 3 分の 2 以上	100

教科書

教科書1	思い出トランプ		
出版社名	新潮社	著者名	向田邦子
教科書2	号泣する準備はできていた		
出版社名	新潮社	著者名	江國香織
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

芥川賞作家としての経験を活かし、創作技法や批評眼を習得させる。

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	一年間の授業概要とスケジュールの説明。
2	教授による短編小説の構造分析。
3	教授による短編小説の構造分析。
4	教授による短編小説の構造分析。
5	教授による短編小説の構造分析。
6	教授による短編小説の構造分析。
7	教授による短編小説の構造分析。
8	教授による短編小説の構造分析。
9	教授による短編小説の構造分析。
10	教授による短編小説の構造分析。
11	教授による短編小説の構造分析。
12	教授による短編小説の構造分析。
13	教授による短編小説の構造分析。
14	院生による短編小説の構造分析。
15	院生による短編小説創作。

科目名	文学創作特殊研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	玄 月				
クラス名					

授業目的と到達目標

タイプの違ういくつかの短編小説の構造分析を行い、文体、構成を研究する。批評眼を養う。

授業概要

これまで漫然と読んできたであろう小説から、視点、文体、構成、長所、欠点、作者の癖などを洗い出し、詳しく分析する。
そこで得た「小説の技法」を元に、受講生各自が既存の短編の構造分析を行う。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

読む・書くだけでなく、人の話をよく聞き、理解すること。指定された本は精読すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
課題はすべて提出。主体的な授業参加 3 分の 2 以上	100

教科書

教科書1	思い出トランプ		
出版社名	新潮社	著者名	向田邦子
教科書2	号泣する準備はできていた		
出版社名	新潮社	著者名	江國香織
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

芥川賞作家としての経験を活かし、創作技法や批評眼を習得させる。

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	一年間の授業概要とスケジュールの説明。
2	教授による短編小説の構造分析。
3	教授による短編小説の構造分析。
4	教授による短編小説の構造分析。
5	教授による短編小説の構造分析。
6	教授による短編小説の構造分析。
7	教授による短編小説の構造分析。
8	教授による短編小説の構造分析。
9	教授による短編小説の構造分析。
10	教授による短編小説の構造分析。
11	教授による短編小説の構造分析。
12	教授による短編小説の構造分析。
13	教授による短編小説の構造分析。
14	院生による短編小説の構造分析。
15	院生による短編小説創作。

科目名	文学創作特殊研究3	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	木下　昌輝				
クラス名					

授業目的と到達目標

建学の精神である「創造性の奨励」に基づき、プロのエンタメ作家として通用するための独自の創作メソッドを作りあげる。

授業概要

映画ドラマなどの映像作品を鑑賞して、プロットや創作メソッドに分解して落とし込む。
それを通じて、自分なりの創作メソッドを作りあげる。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
出席と授業態度	50
最後に創作メソッドの発表、もしくは既存の創作メソッドを使って、長編プロットを発表する。	50

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験	
授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
2	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
3	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
4	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
5	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
6	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
7	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
8	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
9	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
10	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
11	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
12	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
13	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
14	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
15	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。

科目名	文学創作特殊研究4	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	木下　昌輝				
クラス名					

授業目的と到達目標

建学の精神である「創造性の奨励」に基づき、プロのエンタメ作家として通用するための独自の創作メソッドを作りあげる。

授業概要

映画ドラマなどの映像作品を鑑賞して、プロットや創作メソッドに分解して落とし込む。
それを通じて、自分なりの創作メソッドを作りあげる。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
出席と授業態度	50
最後に創作メソッドの発表、もしくは既存の創作メソッドを使って、長編プロットを発表する。	50

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験	
授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
2	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
3	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
4	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
5	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
6	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
7	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
8	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
9	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
10	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
11	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
12	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
13	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
14	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
15	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。

科目名	演奏特殊研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	今川　裕代				
クラス名					

授業目的と到達目標

ピアノ協奏曲の起源と歴史を知り、主だった協奏曲を時代順に研究する。
前期はウィーン古典派の協奏曲から 1～2 曲学び、オーケストラと楽曲を奏する際に必要な分析力や技術を養い、レパートリーとなるよう仕上げる。

授業概要

ピアノ2台形式で行う。
協奏曲を演奏する際の表現方法、音の響かせ方を体得し、オーケストラや指揮者との息の合わせ方を学ぶ。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

各々が研究する楽曲の分析、練習。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業に取り組む姿勢	60
テスト	40

教科書

教科書1	各々が研究する楽曲のオーケストラスコア譜、2 台ピアノ譜		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

出席回数が全授業回数の 3 分の 2 以上に達しない場合は単位を付与しない。
教員実務経験
オーケストラとの豊富な共演経験を踏まえ、技術的問題、楽曲解釈における問題を討議、指導する。
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	1 年間の授業計画の説明。 協奏曲の起源を知り、様々な協奏曲を時代順に調べ、前期と後期に研究する楽曲を選び、3回目の授業までに譜読みをする。
2	前期に研究する楽曲の背景、作曲家について調べる。
3	各々が選曲した楽曲の 1 楽章
4	1 楽章の続き
5	1 楽章　カデンツを加えて
6	1 楽章の仕上げ
7	2 楽章
8	2 楽章仕上げ
9	終楽章
10	終楽章の続き
11	終楽章の仕上げ
12	選曲した楽曲の CD 及び DVD 鑑賞
13	指揮者の視点から考察し、オーケストラパートを演奏する
14	全楽章の復習、仕上げ
15	全楽章の仕上げとテスト

科目名	演奏特殊研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	今川　裕代				
クラス名					

授業目的と到達目標

ピアノ協奏曲の起源と歴史を知り、主だった協奏曲を時代順に研究する。
後期はロマン派以降の協奏曲から 1～2 曲学び、オーケストラと楽曲を奏する際に必要な分析力や技術を養い、レパートリーとなるよう仕上げる。

授業概要

ピアノ2台形式で行う。
協奏曲を演奏する際の表現方法、音の響かせ方を体得し、オーケストラや指揮者との息の合わせ方を学ぶ。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

各々が研究する楽曲の分析、練習。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業に取り組む姿勢	60
テスト	40

教科書

教科書1	各々が研究する楽曲のオーケストラスコア譜、2 台ピアノ譜		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

出席回数が全授業回数の 3 分の 2 以上に達しない場合は単位を付与しない。
教員実務経験
オーケストラとの豊富な共演経験を踏まえ、技術的問題、楽曲解釈における問題を討議、指導する。
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	ロマン派以降の協奏曲について 後期に研究する楽曲の背景、作曲家について調べる。
2	各々が選曲した楽曲の 1 楽章
3	1 楽章の続き
4	1 楽章の続き
5	1 楽章　カデンツを加えて
6	1 楽章の仕上げ
7	2 楽章
8	2 楽章の続き　、仕上げ
9	終楽章
10	終楽章の続き
11	終楽章の仕上げ
12	選曲した楽曲の CD 及び DVD 鑑賞
13	指揮者の視点から考察し、オーケストラパートを演奏する
14	全楽章の復習、仕上げ
15	全楽章の仕上げとテスト

科目名	演奏特殊研究3	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	伊勢　敏之、本田　耕一				
クラス名					

授業目的と到達目標

◆ 授業の目的
- ●本授業では、室内楽演奏を作品研究に基づく芸術的探究として位置付け、分析・討議・演奏実践・検証のプロセスを通じて高度な演奏解釈の構築を目指す。
- ●室内楽作品の研究および分析を通して作品理解を深化させ、演奏行為を単なる再現に留めず、研究成果に基づいた演奏解釈を構築する能力を養うことを目的とする。
- ●演奏実践と学術的考察を往還させながら、専門的演奏家として必要な高度な音楽理解および表現力の修得を目指す。

◆到達目標

受講者は以下を達成することを目標とする。
- ●楽曲分析および資料研究を基に根拠ある演奏解釈を提示できる。
- ●曲家の様式および歴史的背景を踏まえた演奏実践ができる。
- ●アンサンブルにおける音楽的対話を通して作品理解を深化できる。
- ●研究成果を演奏として具体的に表現できる。

授業概要

本授業では室内楽作品の研究、分析、討議および演奏実践を通して解釈形成のプロセスを学ぶ。
授業最終日に演奏発表会を実施し、研究成果と演奏成果を統合的に提示する。
さらに、アンサンブルにおける音楽的対話や解釈形成のプロセスを重視し、演奏者相互の批評的検討を通して高度な室内楽演奏能力を養う。
演奏解釈を固定的なものとして扱うのではなく、研究・議論・実践を通して再構築していく過程を重視する。
受講者間でのディスカッションおよび相互講評を通して、多角的視点から作品理解を深める。
演奏会を想定した実践的リハーサルプロセスについても学ぶ。
◆授業では以下の内容を中心に進める。
・演奏楽曲の選定および作品・作曲家・時代背景に関する調査研究
・研究内容に基づいたプレゼンテーションの実施・楽曲構造、様式、和声、形式等の分析および分析手法の習得
・研究成果を演奏へ反映させ、解釈の変化や音楽的成長を検証する
・CD・DVD等の資料を用いた歴史的名演および演奏様式の比較研究
・演奏録音・録画を行い、客観的視点から自己およびアンサンブル演奏を分析する

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

履修者は本授業が高度な演奏実践および研究活動を伴う大学院科目であることを十分理解したうえで受講すること。
●授業は受動的に指導を受ける場ではなく、各自が研究者および演奏家として主体的に課題へ取り組むことを前提とする。
●授業までに楽譜研究および十分な個人練習を行い、アンサンブル研究を深化させる準備を整えて臨むこと。
●楽曲分析、資料調査、演奏解釈について自らの考えを持ち、積極的に議論および提案を行うこと。
●リハーサルおよび授業内で指摘された課題については次回までに改善を図ること。
●室内楽は高度な共同創造活動であることを理解し、演奏者相互の尊重と専門的態度をもって参加すること。
●十分な準備が認められない場合、授業進行に支障を来すため履修継続が困難となる場合がある。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
本授業では、研究過程および演奏成果を総合的に評価するが、特に授業最終日に実施する演奏発表会における演奏内容を重視する。 単なる演奏技術のみではなく、研究成果が演奏表現としてどの程度具体化されているかを重視して評価する。	60

演奏発表に至るまでの研究過程、解釈形成のプロセス、およびアンサンブルにおける協働的創造性を含めて総合的に評価する。評価は以下の観点に基づいて行う。 ●最終演奏発表会における演奏内容 （音楽的完成度・アンサンブル能力・作品理解の反映）	
●楽曲研究およびプレゼンテーション内容（分析・考察の深さ）	20
●授業への取り組み姿勢（リハーサルへの主体的参加、課題改善の過程）	20

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

演奏家およびアンサンブル指導者としての実演活動ならびに教育経験を有する。
これらの実務経験を基盤として、作品研究に基づく演奏解釈、アンサンブル構築、実践的リハーサル手法等を授業に反映した指導を行う。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	［第1回へ向けて、取り組みたい候補楽曲のピックアップ］ ガイダンス（方針説明、成績評価方法の説明等)取り組む楽曲や研究課題の相談・決定 ［第2回へ向けてのレポートや Power Point などを用いた研究発表の準備と楽曲の練習（標準8時間）］
2	作曲者・作曲背景、作品そのものについての研究発表と学生どうしや教員によるフィードバック ［第3回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
3	取り組む楽曲の分析①

	楽曲の構造、構成について 演奏実践 ［第4回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
4	取り組む楽曲の分析② 楽曲の構造、構成について 演奏実践 ［第5回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
5	取り組む楽曲の分析③ 調性・和声について 演奏実践［第6回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
6	取り組む楽曲の分析④ 各フレーズのデザイン、表情・表現について 演奏実践 ［第7回発表へ向けた分析の復習と楽曲の練習（標準5時間）］
7	研究成果の演奏発表　録音・録画など 学生どうしや教員によるフィードバック 今後の課題や練習上の留意点について ［第8回へ向けて、取り組みたい候補楽曲のピックアップ］
8	取り組む楽曲や研究課題の相談・方針決定 ［第9回へ向けてのレポートや Power Point などを用いた研究発表の準備と楽曲の練習（標準8時間）］
9	作曲者・作曲背景、作品そのものについての研究発表と学生どうしや教員によるフィードバック ［第10回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
10	取り組む楽曲の分析① 楽曲の構造、構成について 演奏実践 ［第11回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
11	取り組む楽曲の分析② 楽曲の構造、構成について 演奏実践 ［第12回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
12	取り組む楽曲の分析③ 調性・和声について 演奏実践 ［第13回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
13	取り組む楽曲の分析④各フレーズのデザイン、表情・表現について 演奏実践 ［第14回発表へ向けた分析の復習と楽曲の練習（標準5時間）］
14	研究成果の演奏発表　録音・録画など 学生どうしや教員によるフィードバック 今後の課題や練習上の留意点について ［第15回へ向けた分析の復習と振り返り・気付きをまとめる（標準 8 時間）］
15	演奏発表会のゲネプロ　本番　録画 まとめ、前期の総括、振り返り・気付きの発表など 今後の課題や練習上の留意点について

科目名	演奏特殊研究4	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	伊勢　敏之、本田　耕一				
クラス名					

授業目的と到達目標

◆ 授業の目的
- ●本授業では、室内楽演奏を作品研究に基づく芸術的探究として位置付け、分析・討議・演奏実践・検証のプロセスを通じて高度な演奏解釈の構築を目指す。
- ●室内楽作品の研究および分析を通して作品理解を深化させ、演奏行為を単なる再現に留めず、研究成果に基づいた演奏解釈を構築する能力を養うことを目的とする。
- ●演奏実践と学術的考察を往還させながら、専門的演奏家として必要な高度な音楽理解および表現力の修得を目指す。

◆到達目標

受講者は以下を達成することを目標とする。
- ●楽曲分析および資料研究を基に根拠ある演奏解釈を提示できる。
- ●曲家の様式および歴史的背景を踏まえた演奏実践ができる。
- ●アンサンブルにおける音楽的対話を通して作品理解を深化できる。
- ●研究成果を演奏として具体的に表現できる。

授業概要

本授業では室内楽作品の研究、分析、討議および演奏実践を通して解釈形成のプロセスを学ぶ。
授業最終日に演奏発表会を実施し、研究成果と演奏成果を統合的に提示する。
さらに、アンサンブルにおける音楽的対話や解釈形成のプロセスを重視し、演奏者相互の批評的検討を通して高度な室内楽演奏能力を養う。
演奏解釈を固定的なものとして扱うのではなく、研究・議論・実践を通して再構築していく過程を重視する。
受講者間でのディスカッションおよび相互講評を通して、多角的視点から作品理解を深める。
演奏会を想定した実践的リハーサルプロセスについても学ぶ。

◆授業では以下の内容を中心に進める。
- ・演奏楽曲の選定および作品・作曲家・時代背景に関する調査研究
- ・研究内容に基づいたプレゼンテーションの実施・楽曲構造、様式、和声、形式等の分析および分析手法の習得
- ・研究成果を演奏へ反映させ、解釈の変化や音楽的成長を検証する
- ・CD・DVD等の資料を用いた歴史的名演および演奏様式の比較研究
- ・演奏録音・録画を行い、客観的視点から自己およびアンサンブル演奏を分析する

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

履修者は本授業が高度な演奏実践および研究活動を伴う大学院科目であることを十分理解したうえで受講すること。
- ●授業は受動的に指導を受ける場ではなく、各自が研究者および演奏家として主体的に　課題へ取り組むことを前提とする。
- ●授業までに楽譜研究および十分な個人練習を行い、アンサンブル研究を深化させる準備を整えて臨むこと。
- ●楽曲分析、資料調査、演奏解釈について自らの考えを持ち、積極的に議論および提案を行うこと。
- ●リハーサルおよび授業内で指摘された課題については次回までに改善を図ること。
- ●室内楽は高度な共同創造活動であることを理解し、演奏者相互の尊重と専門的態度をもって参加すること。
- ●十分な準備が認められない場合、授業進行に支障を来すため履修継続が困難となる場合がある。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
本授業では、研究過程および演奏成果を総合的に評価するが、特に授業最終日に実施する演奏発表会における演奏内容を重視する。 単なる演奏技術のみではなく、研究成果が演奏表現としてどの程度具体化されているかを重視して評価する。	60

演奏発表に至るまでの研究過程、解釈形成のプロセス、およびアンサンブルにおける協働的創造性を含めて総合的に評価する。評価は以下の観点に基づいて行う。 ●最終演奏発表会における演奏内容 （音楽的完成度・アンサンブル能力・作品理解の反映）	
●楽曲研究およびプレゼンテーション内容（分析・考察の深さ）	20
●授業への取り組み姿勢（リハーサルへの主体的参加、課題改善の過程）	20

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

演奏家およびアンサンブル指導者としての実演活動ならびに教育経験を有する。
これらの実務経験を基盤として、作品研究に基づく演奏解釈、アンサンブル構築、実践的リハーサル手法等を授業に反映した指導を行う。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	［第1回へ向けて、取り組みたい候補楽曲のピックアップ］ ガイダンス（方針説明、成績評価方法の説明等） 取り組む楽曲や研究課題の相談・決定 ［第2回へ向けてのレポートや Power Point などを用いた研究発表の準備と楽曲の練習（標準8時間）］
2	作曲者・作曲背景、作品そのものについての研究発表と学生どうしや教員によるフィードバック ［第3回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］

3	取り組む楽曲の分析① 楽曲の構造、構成について 演奏実践 ［第4回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
4	取り組む楽曲の分析② 楽曲の構造、構成について 演奏実践 ［第5回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
5	取り組む楽曲の分析③ 調性・和声について 演奏実践 ［第6回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
6	取り組む楽曲の分析④ 各フレーズのデザイン、表情・表現について 演奏実践 ［第7回発表へ向けた分析の復習と楽曲の練習（標準5時間）］
7	研究成果の演奏発表　録音・録画など 学生どうしや教員によるフィードバック 今後の課題や練習上の留意点について ［第8回へ向けて、取り組みたい候補楽曲のピックアップ］
8	取り組む楽曲や研究課題の相談・方針決定 ［第9回へ向けてのレポートや Power Point などを用いた研究発表の準備と楽曲の練習（標準8時間）］
9	作曲者・作曲背景、作品そのものについての研究発表と学生どうしや教員によるフィードバック ［第10回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
10	取り組む楽曲の分析① 楽曲の構造、構成について演奏実践 ［第11回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
11	取り組む楽曲の分析② 楽曲の構造、構成について演奏実践 ［第12回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
12	取り組む楽曲の分析③ 調性・和声について演奏実践 ［第13回へ向けた分析の予習と楽曲の練習（標準5時間）］
13	取り組む楽曲の分析④ 各フレーズのデザイン、表情・表現について 演奏実践 ［第14回発表へ向けた分析の復習と楽曲の練習（標準5時間）］
14	研究成果の演奏発表　録音・録画など 学生どうしや教員によるフィードバック 今後の課題や練習上の留意点について ［第15回へ向けた分析の復習と振り返り・気付きをまとめる（標準 8 時間）］
15	演奏発表会のゲネプロ　本番　録画 まとめ、前期の総括、振り返り・気付きの発表など 今後の課題や練習上の留意点について

科目名	演奏特殊研究5	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	阪本 朋子				
クラス名					

授業目的と到達目標

・声楽専攻者は、オペラ、歌曲、ミュージカル等、取り組みたいジャンルを明確にし、表現者として自らの能力や魅力を発見し、共感を得られる奏者としての能力を身につけます。
・ピアノ専攻者は、伴奏者としての能力の開発を目的とします。コードネーム奏法、アレンジメント奏法、オペラなどのスコアの読み方、オーケストレーションを学び、実用的な技術の習得を目指します。
・ジャンルに関係なく、自らのパフォーマンスを言語化する能力を身につけます。

授業概要

自由にディスカッションできる環境を大切にします。
「音楽」について、大いに語り合いましょう。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

受講に際しては、自らが研究したい楽曲の楽譜を、必要部数（指導教員及び受講生）準備して授業に臨んでください。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
成果発表パフォーマンス 100%	

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

個別に指示します。

特記事項
声楽専攻の学生には、演技演習にふさわしい服装での参加を提示することがあります。

教員実務経験
歌手に対して適切なアドバイス力を求められるコレペティ（オペラ歌手の下稽古）の経験を活かして、コレペティに求められる能力の方向性を示す。指揮者のもとでピアノを弾く際に必要な基本的な能力（正確なテンポの維持、指揮者のデュナーミクを感じ取り、実際の音にする能力）などを習得させる。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	オリエンテーション受講生の専攻分野を確認
2	課題の演奏と、ディスカッション
3	課題の演奏と、ディスカッション
4	課題の演奏と、ディスカッション
5	課題の演奏と、ディスカッション
6	課題の演奏と、ディスカッション
7	課題の演奏と、ディスカッション
8	課題の演奏と、ディスカッション
9	課題の演奏と、ディスカッション
10	課題の演奏と、ディスカッション
11	課題の演奏と、ディスカッション
12	課題の演奏と、ディスカッション
13	前期成果発表に向けて準備①
14	前期成果発表に向けて準備②
15	コンサート形式による成果発表

科目名	演奏特殊研究6	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	阪本　朋子				
クラス名					

授業目的と到達目標

前期の目的と目標に加えて、「知識」から「知識を動かす力」を身につけ、実社会へいかにつなげて行くかを探ります。

授業概要

前期と同様です。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

前期と同様です。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業修了コンサートでの発表　100%	

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

個別に指示します。

特記事項

声楽専攻の学生には、演技演習にふさわしい服装での参加を提示することがあります。

教員実務経験
歌手に対して適切なアドバイス力を求められるコレペティ（オペラ歌手の下稽古）の経験を活かして、コレペティに求められる能力の方向性を示す。 指揮者のもとでピアノを弾く際に必要な基本的な能力（正確なテンポの維持、指揮者のデュナーミクを感じ取り実際の音にする能力）などを習得させる。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション
2	前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
3	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
4	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
5	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
6	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
7	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
8	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
9	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
10	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
11	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
12	受講生各人の課題を全受講生で共有し、多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
13	授業修了コンサートの準備①
14	授業修了コンサートの準備②
15	授業修了コンサート

科目名	演奏特殊研究8	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	栗山　和樹				
クラス名	後期：栗山先生は集中講義です。				

授業目的と到達目標

クラシック音楽演奏家であっても、演奏や教育の現場でポピュラー音楽を演奏する機会があるかと思います。このクラスではコード進行、ボイシング、コンピング、アドリブなどポピュラー音楽の基礎をジャズ史と共に学び、ポピュラー音楽理論の基礎力を身に付けることを目標とします。

授業概要

「ポピュラー音楽演奏の基礎」：ボサノバやジャズ・スタンダード曲を教材にコード・ヴォイシングの実践を通して、コード・ネームやスケールなどポピュラー音楽演奏に必要な基本事項を学び、アドリブにもトライしてみます。 ジャズの歴史を俯瞰することにより、どうしてこのような技法ができたかをも考えます。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

課題を必ず演習してみること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
提出課題の評価、および授業へ取り組む姿勢により評価。	

教科書

教科書1	授業内で配布するハンドアウト。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
作編曲家として長年、商業音楽の世界で実践してきたポピュラー音楽における作編曲およびピアノ演奏の経験を活かし、ポピュラー音楽におけるコード理論の実践方法を取得させる。アメリカ留学時に学んだアメリカにおける「大学におけるジャズ教育方法」を基礎に、30年以上にわたる日本の音楽大学でのポピュラー音楽理論指導の経験を活かし、自らが体系化した方法による授業をする。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	「コードシンボル」
2	2 ノート・ヴォイシング
3	フォー・ウエイ・クロース
4	テンション①　9th
5	テンション②　13th
6	テンション③　振り子ベース
7	「いつか王子さまが」実習
8	映画『ベニィ・グッドマン物語』で学ぶジャズの歴史①
9	映画『ベニィ・グッドマン物語』で学ぶジャズの歴史②
10	スケール
11	枯葉　短調のヴォイシング
12	ベースライン
13	ブルース
14	ドロップ・ツー
15	質疑応答

科目名	演奏特殊研究9	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	水口　聡				
クラス名					

授業目的と到達目標

高度な歌唱技術を身につけ、豊かな音楽性を育む

授業概要

オペラ・アリアを古典から現代までの時代も超えたあらゆる作品を取り上げ、正しいテクニックに基づいた歌唱表現を舞台で実践出来る歌手を育てる。さらに国際オペラコンクール、オペラ劇場を目指す学生の為のアドバイスを教授する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	呼吸法の基礎
2	歌唱法の実践
3	各々の学生に相応しいレパートリーを試みる
4	各々の学生の声種とレパートリー
5	レパートリーの調整
6	レパートリーの調整
7	発声と作品の解釈
8	舞台上で声を通しての表現の仕方
9	イタリアオペラ、ドイツオペラ、フランスオペラの歌詞とメロディーの伝え方
10	イタリアオペラ、ドイツオペラ、フランスオペラの歌詞とメロディーの伝え方
11	舞台上でのオペラ歌手の為の演技の基本
12	声種にあったレパートリーから二重唱を試みる
13	声種にあったレパートリーから4重唱を試みる
14	舞台で演奏
15	ホールで演奏

科目名	演奏特殊研究10	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	水口　聡				
クラス名					

授業目的と到達目標

高度な歌唱技術を身につけ、豊かな音楽性を育む。

授業概要

オペラ・アリアを古典から現代までの時代も超えたあらゆる作品を取り上げ、正しいテクニックに基づいた歌唱表現を舞台で実践できる歌手を育てる。さらに国際オペラコンクール、オペラ劇場を目指す学生の為のアドバイスを教授する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	正しい呼吸法のもと、歌唱いおいて必要な自然で豊かな声を出すことを目指す。
2	正しい呼吸法のもと、歌唱いおいて必要な自然で豊かな声を出すことを目指す。
3	オペラ、それぞれにおける様式を習得し、それを表現に結び付ける。
4	オペラ、それぞれにおける様式を習得し、それを表現に結び付ける。
5	オペラ、それぞれにおける様式を習得し、それを表現に結び付ける。
6	ステージ上でのマナー、表情、表現等を体得し、真の舞台人の育成を図る。
7	ステージ上でのマナー、表情、表現等を体得し、真の舞台人の育成を図る。
8	作品を通して実践する。
9	作品を通して実践する。
10	オペラ、オペレッタのレチタティーヴォの表現のテクニックを学ぶ。
11	
12	オペラ、オペレッタのレチタティーヴォの表現のテクニックを学ぶ。
13	オペラの衣装の歴史と様式を学ぶ。
14	舞台で実践する。
15	ホールで演奏する。

科目名	作曲特殊研究1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	加登　匡敏				
クラス名					

授業目的と到達目標

電子音響音楽（Electroacoustic Music）における高度な創作技法と理論的研究を探求し、独自の芸術的表現を確立することを目的とし、テクノロジーを用いた音楽表現の可能性を多角的に検証します。

授業概要

初期のミュージックコンクレートや電子音楽から、現代のライブエレクトロニクス、アルゴリズミック・コンポジションに至るまでの歴史的変遷を分析します。既存の作品研究を通じて、自身の創作における美学的・哲学的根拠を明確にします。
最終的には、作品の公開（演奏）や展示を通じて、音響空間のデザインや聴衆への提示方法についても実践的に学びます。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

本授業で扱う研究内容より、後期開講の「作曲特殊研究２」と一緒に受講することを推奨します。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業に取り組む姿勢	60
研究発表	40

教科書

教科書1	教科書は使用しないが適宜プリント等を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業時に適宜紹介する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	オリエンテーション、研究立案
2	制作演習と個別指導
3	制作演習と個別指導
4	制作演習と個別指導
5	制作演習と個別指導
6	制作演習と個別指導
7	制作演習と個別指導
8	中間発表、ディスカッション
9	制作演習と個別指導
10	制作演習と個別指導
11	制作演習と個別指導
12	制作演習と個別指導
13	制作演習と個別指導
14	制作演習と個別指導
15	研究発表

科目名	作曲特殊研究2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	加登　匡敏				
クラス名					

授業目的と到達目標

電子音響音楽（Electroacoustic Music）における高度な創作技法と理論的研究を探求し、独自の芸術的表現を確立することを目的とし、テクノロジーを用いた音楽表現の可能性を多角的に検証します。

授業概要

固定メディア作品から、楽器演奏を伴う混合楽曲、さらには身体性や空間性を伴うパフォーマンスやインスタレーションまで、多様な形態での作品制作を行います。作品の公開演奏や展示を通じて、音響空間のデザインや聴衆への提示方法についても実践的に学びます。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

本授業で扱う研究内容より、前期開講の「作曲特殊研究1」と一緒に受講することを推奨します。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業に取り組む姿勢	60
研究発表	40

教科書

教科書1	教科書は使用しないが適宜プリント等を配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業時に適宜紹介する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション、研究立案
2	制作演習と個別指導
3	制作演習と個別指導
4	制作演習と個別指導
5	制作演習と個別指導
6	制作演習と個別指導
7	制作演習と個別指導
8	中間発表、ディスカッション
9	制作演習と個別指導
10	制作演習と個別指導
11	制作演習と個別指導
12	制作演習と個別指導
13	制作演習と個別指導
14	制作演習と個別指導
15	研究発表

科目名	作曲特殊研究3	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	演習		
教員名	高橋　裕				
クラス名					

授業目的と到達目標
世に出しても通用する大学院修士修了作品を作曲出来るようになることが到達目標であり、そのために多くの楽曲の作品分析やオーケストレーションを習得することを目的とする。

授業概要
和声学、フランス近代音楽の楽曲のアナリーゼをはじめとし、オーケストレーションを徹底して学ぶ。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意
和声学は常に予習復習は常に行うことを原則とする。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
和声学	3割
楽曲分析	3割
オーケストレーション	4割

教科書

教科書1	管弦楽法		
出版社名	音楽之友社	著者名	伊福部昭
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

和声学、楽曲分析、オーケストレーションと学ぶことは多く、休まず寛容に学ぶことは大切である。

教員実務経験
教員は室内楽からオーケストラ、オペラに至るまで多くの作曲をしてきている。これまで本校の大学院修士修了生6名を教え、様々な院生に対応する能力も持っている。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1. 和声学、ドビュッシーの前奏曲、ラヴェルの亡き王女のためのパヴァーヌ
2	2. 和声学、ドビュッシーの前奏曲、ラヴェルの亡き王女のためのパヴァーヌ
3	3. 和声学、ドビュッシーの前奏曲、ラヴェルの亡き王女のためのパヴァーヌ
4	4. 和声学、ドビュッシーの前奏曲、ラヴェルの亡き王女のためのパヴァーヌ
5	5. 和声学、ドビュッシーの前奏曲、ラヴェルの亡き王女のためのパヴァーヌ
6	6. 和声学、ドビュッシーの前奏曲、ラヴェルの亡き王女のためのパヴァーヌ
7	7. 和声学、ドビュッシーの前奏曲、ラヴェルの亡き王女のためのパヴァーヌ
8	1. 和声学、クープランの墓、展覧会の絵
9	2. 和声学、クープランの墓、展覧会の絵
10	3. 和声学、クープランの墓、展覧会の絵
11	4. 和声学、クープランの墓、展覧会の絵
12	5. 和声学、クープランの墓、展覧会の絵
13	6. 和声学、クープランの墓、展覧会の絵
14	7. 和声学、クープランの墓、展覧会の絵
15	8. 和声学、クープランの墓、展覧会の絵

科目名	作曲特殊研究4	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	演習		
教員名	高橋　裕				
クラス名					

授業目的と到達目標
世に出しても通用する大学院修士修了作品を作曲出来るようになることが到達目標であり、そのために多くの楽曲の作品分析やオーケストレーションを習得することを目的とする。

授業概要
和声学、フランス近代音楽の楽曲のアナリーゼをはじめとし、オーケストレーションを徹底して学ぶ。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意
和声学は常に予習復習は常に行うことを原則とする。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
和声学	3割
楽曲分析	3割
オーケストレーション	4割

教科書

教科書1	管弦楽法		
出版社名	音楽之友社	著者名	伊福部昭
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
2	2. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
3	3. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
4	4. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
5	5. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
6	6. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
7	7. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
8	8. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
9	9. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
10	10. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
11	11. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
12	12. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
13	13. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
14	14. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション
15	15. 和声学、院生の作曲作品に応じた楽曲の分析、オーケストレーション

科目名	芸術学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	加藤　哲弘				
クラス名					

授業目的と到達目標

芸術を制作することとも楽しむこととも異なる、芸術を「学ぶ」ということについて包括的な理解を得ることで、建学の精神にもある創造性を涵養することを講義の目的とする。本講義で得られた知見を各自の作品制作や批評活動に活かすとともに、受講生が、芸術を学ぶ大学院生として、自らの立脚点を自覚できるようになることを目指したい。

授業概要

第 2 回から第 14 回まで各回ごとに、芸術（アート）の目的を論じた古典的な文献を採りあげて、内容紹介と検討を行う。具体的には、古代ギリシアや近代欧米の理論家や芸術家たちによる著作を概観して、芸術が何のために存在するのかを考察する。なお下記の授業計画は暫定的なものであり、受講学生の興味に応じて変更する場合がある。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

講義開始の前に指示する参考文献を読んでおくこと。授業内容を知識として暗記するのではなく、つねに問題意識とともに理解するようにすること。また、機会があれば、美術館における作品展示を見たり、多様なジャンルの芸術を積極的に体験するようにしておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
平常点（授業内容への理解、ディスカッションへの積極的参加、質問への解答など）	100

教科書

教科書1	使用しない（必要のあるときは UNIPA 経由で事前にプリントを配布する）。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	『美学の事典』		
出版社名	丸善出版	著者名	美学会編
参考書名2	『芸術理論古典文献アンソロジー（西洋篇）』		
出版社名	幻冬舎	著者名	加藤哲弘編
参考書名3	『美術の物語』		
出版社名	河出書房新社	著者名	ゴンブリッチ
参考書名4	『芸術の諸相（講座美学第 4 巻）』		
出版社名	東京大学出版会	著者名	今道友信
参考書名5	『芸術学』		

出版社名	東京大学出版会	著者名	渡辺護

参考 URL

特記事項

教員実務経験
関西学院大学博物館長（2020-21 年度）

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1　0413　講義概要の説明
2	2　0420　プラトン『国家』（c.375 BC）
3	3　0427　アリストテレス『詩学』（c.335-330 BC）
4	4　0508（未定）
5	5　0511　ルブラン「感情表現に関する講演」（1696）
6	6　0518　レッシング『ラオコオン』（1766）
7	7　0525　カント『判断力批判』（1790）
8	8　0601　ヘーゲル『美学講義』（1817-29）
9	9　0608　ハイデガー『芸術作品の根源』（1935）
10	10　0615　ベンヤミン『複製技術時代の芸術』（1935）
11	11　0622　ブルトン『シュルレアリスム宣言』（1924）
12	12　0629　グリーンバーグ「モダニズムの絵画」（1960）
13	13　0706　エーコ『開かれた作品』（1962）
14	14　0713　ダントー『ありふれたものの変容』（2017）
15	15　0727　まとめとコメント

科目名	芸術学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	加藤　哲弘				
クラス名					

授業目的と到達目標

現代美術における古典的作品と現代美術を論じる古典的な批評言説についての基本的な理解を得るこを目的とする。本講義で得られた知見を各自の作品制作や批評活動に活かすとともに、受講生が、芸術を学ぶ大学院生として、建学の精神にもある創造性を身につけ、自らの立脚点を自覚できるようになることを目指したい。

授業概要

20 世紀末から 21 世紀の現在に至るまでのアートの展開の中から古典的と呼ばれる作品を採りあげ、その紹介と討論を行う。基本的にはテクスト（日本語訳）の講読と討論を通して、現代アートを論じる際に念頭に置いておくべき基礎的な文献の解題を行う。なお、下記の授業計画は暫定的なものであり、受講学生の興味に応じて変更する場合がある。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

講義までに指示する参考文献を読んでおくこと。授業内容を知識として暗記するのではなく、つねに問題意識とともに理解するようにすること。また、機会があれば、ビエンナーレや国際展などの現代アートの展覧会を訪れたり、美術館における作品展示を見たりしておくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
平常点（授業内容への理解、ディスカッションへの積極的参加、質問への解答など）	100

教科書

教科書1	使用しない（必要があれば、UNIPA 経由で授業資料を配布する）。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	『美学の事典』		
出版社名	丸善出版	著者名	美学会編
参考書名2	『現代美術史　欧米、日本、トランスナショナル』		
出版社名	中央公論新社	著者名	山本浩貴
参考書名3	『20 世紀美術』		
出版社名	筑摩書房	著者名	高階秀爾
参考書名4	『"めくるめく現代アート』		
出版社名	フィルムアート社	著者名	筧菜奈子
参考書名5	『なぜ、これがアートなの？』		
出版社名	淡交社	著者名	A・アレナス

参考 URL

特記事項

教員実務経験
関西学院大学博物館長（2020-21 年度）

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	1　0907　講義概要（モダンとポストモダン）
2	2　0914　ポストモダニズム建築
3	3　0924（未定）
4	4　0928　パフォーマンスインスタレーション
5	5　1005　パブリックアート
6	6　1019　メディア芸術（マクルーハン）
7	7　1026　ポストコロニアル（サイード）
8	8　1109　ジェンダー（ポロック）
9	9　1116　脱構築建築（隈研吾）
10	10　1125（未定）
11	11　1130　ヴァナキュラー、ポップ、サブカルチャー
12	12　1207　アートの価値　教養、観光、市場、そして AI
13	13　1214　芸術のグローバル化とディアスポラ
14	14　1221　アクティヴィズム（バンクシー）
15	15　0118　まとめとコメント

科目名	美術史学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	石井　元章				
クラス名					

授業目的と到達目標

建学の精神の国際的視野に立って、本講は美術史学に必要な基礎知識を習得することを目的とする図像学の基礎である文献（典拠）と図像の関係を押さえ、作品の特殊性を解明する訓練を行う

授業概要

美術史学の基礎の一つ、イコノグラフィーをギリシア・ローマ神話主題とキリスト教主題に関して考察する

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

美術史学の基礎知識を習得すると同時に、先行研究論文の読み方もマスターしてほしい

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業に対する態度	50
レポート	50

教科書

教科書1	西洋美術の歴史 4 ルネサンス 1		
出版社名	中央公論社	著者名	小佐野重利他
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	西洋美術解読事典		
出版社名	河出書房新社	著者名	ジェイムズ・ホール
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション イコノグラフィーとイコノロジーギリシア・ローマ神話主題とキリスト教主題
2	ウェヌスの変容　1 ギリシア神話のアフロディテの図像が裸婦、横臥像になる過程を追い、それがローマ神話の中でウェヌスの図像として広がっていく過程を理解する
3	ウェヌスの変容　2 古代世界で形成された「横たわる裸婦」としてのウェヌスの図像が、ルネサンス以降の美術の中で受け継がれていく過程を理解する
4	ヘラクレスの変容　1 ギリシア・ローマ神話の中で、第一の英雄としてのヘラクレスの図像が形成させる様を、十二神業を中心として理解する
5	ヘラクレスの変容　2 ルネサンス以降の美術の中で、ヘラクレスの図像がどのように援用されるかを理解する
6	ヴェネツィア神話の誕生 ヴェネツィア共和国の成り立ちとルネサンスの美術の概要を知る
7	ヴェネツィア神話の変容 15・16 世紀のヴェネツィア美術黄金時代について学ぶ
8	聖マルコの物語 1 本来の福音書記者聖マルコ伝を学ぶ中世における図像例を理解する
9	聖マルコの物語　2 15 世紀の作例を理解する
10	聖マルコの物語　3 トゥッリオ・ロンバルド作《総督ジョヴァンニ・モチェニーゴ記念碑》に見られる図像の問題点を指摘する
11	聖マルコの物語　4 聖マルコとアニアヌスの図像の変遷を辿る
12	ヴェネツィアの図像体系　1 ヴェネツィア共和国の中心としてのサン・マルコ広場に込められた象徴的意味を理解する
13	ヴェネツィアの図像体系　2 サン・マルコ広場に込められた象徴的意味と、隣接する総督宮の関係を理解する
14	ヴェネツィアの図像体系　3 新旧行政館、時計塔、ナポレオン翼などについて学ぶ
15	学生発表とレポート提出

科目名	美術史学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	河田　昌之				
クラス名					

授業目的と到達目標

日本美術の特徴を作品内容の読み解きを通して理解することを目指します。仏画、物語や随筆、意匠などさまざまなジャンルに分類されるなかから、代表的な古美術作品を選んで、独自の造形感覚や表現を考えながら、日本美術に対して多くの視点を持つことを目標にします。

授業概要

伊勢物語は源氏物語と並ぶ平安時代を代表する古典文学として知られています。「むかし、をとこありけり」をどこかで聞いたことがあるでしょう。中学、高校時代に習ったことがある人も多いかと思います。在原業平（825～880）はこの物語の主人公として、今も人気が衰えません。2025 年は業平の生誕 1200 年に当たりました。これにともない展覧会が開催され、多くの作品が紹介されました。絵巻や工芸には伊勢物語を題材にした作品が残されています。これらの展覧会を参考にして、伊勢物語 m の美術を取り上げます。その美術とともに、物語の魅力について解説します。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

展覧会でさまざまな作品を観てください。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
レポート	70
平常の授業態度	30

教科書

教科書1	使用しません。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	『伊勢物語　造形表現集成』		
出版社名	思文閣出版	著者名	河田昌之　赤澤真理　大口裕子　伊永陽子編
参考書名2	『伊勢物語絵巻絵本大成』		
出版社名	思文閣出版	著者名	羽衣国際大学日本文化研究所　伊勢物語絵研究会
参考書名3	特別展図録『伊勢物語　雅と恋のかたち』2007 年		
出版社名	和泉市久保惣記念美術館	著者名	和泉市久保惣記念美術館
参考書名4	展覧会図録『伊勢物語　王朝が映す王朝の恋とうた』2025 年 11 月 1 日～12 月 7 日		
出版社名	根津美術館	著者名	
参考書名5	特別展　生誕 1200 年『歌仙在原業平と伊勢物語』2026 年 2 月 7 日～4 月 5 日		

出版社名	三井記念美術館	著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

登録博物館の学芸員として、約 40 年間を展覧会の企画や美術品の収集、保管、展示等の実務にあたり、そのうちの約 10 年間は館長として組織運営や対外的な交流などの美術館マネージメント分野にも携わる。展覧会の企画や開催の実務、海外での作品調査の経験も多い。著書、論文が複数ある。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	伊勢物語絵について 1（平安～江戸時代　絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風）
2	伊勢物語絵について 2（平安～江戸時代　絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風）
3	伊勢物語絵作例1（久保惣美術館本1）
4	伊勢物語絵作例1（久保惣美術館本 2）
5	伊勢物語絵作例 2（小野本 1）
6	伊勢物語絵作例 2（小野本 2）
7	伊勢物語絵作例 3（スペンサーコレクション本）
8	伊勢物語絵作例 4（嵯峨本）
9	伊勢物語絵作例 5（宗達色紙）
10	伊勢物語絵作例 6（光琳、乾山の作品）
11	伊勢物語絵作例 7（住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」）
12	徒然草の絵画（徒然草図の流れ）
13	徒然草図の作例 1（住吉派 1）
14	徒然草図の作例 2（住吉派 2）
15	まとめ　流派による物語理解や表現

科目名	美術史学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	石井　元章				
クラス名					

授業目的と到達目標

建学の精神の国際的視野に立って、本講義は美術史学研究に必要な基礎知識を習得することを目的とし、後期はヴェネツィア美術に関する文献を講読する。

授業概要

サルヴァトーレ・セッティス『絵画の発明』晶文社、2002
デイヴィッド・ローザンド『ヴェネツィア神話』 三元社, 2024
を輪読し、ヴェネツィア・ルネサンス美術に関する理解を深める。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

著作を読みながら、ヴェネツィア美術に関する理解と知識を深める。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業に対する態度	50
レポート	50

教科書

教科書1	西洋美術の歴史 4　ルネサンスⅠ		
出版社名	中央公論新社	著者名	小佐野重利他
教科書2	絵画の発明: ジョルジョーネ「嵐」解読		
出版社名	晶文社	著者名	サルヴァトーレ・セッティス
教科書3	ヴェネツィア神話		
出版社名	三元社	著者名	デヴィッド・ロザンド

参考書・参考文献

参考書名1	西洋美術解読事典		
出版社名	河出書房新社	著者名	ジェイムズ・ホール
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	『絵画の発明』解説
2	『絵画の発明』第一章
3	『絵画の発明』第二章
4	『絵画の発明』第三章
5	『絵画の発明』第四章
6	『絵画の発明』第五章
7	『ヴェネツィア神話』序説
8	『ヴェネツィア神話』第一章
9	『ヴェネツィア神話』第二章
10	『ヴェネツィア神話』第二章
11	『ヴェネツィア神話』第三章
12	『ヴェネツィア神話』第四章
13	『ヴェネツィア神話』第五章
14	『ヴェネツィア神話』第五章
15	まとめ レポート提出

科目名	美術史学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	河田　昌之				
クラス名					

授業目的と到達目標

日本美術の特徴を作品内容の読み解きを通して理解することを目指します。仏画、物語や随筆、意匠などさまざまなジャンルに分類されるなかから、代表的な古美術作品を選んで、独自の造形感覚や表現を考えながら、日本美術に対して多くの視点を持つことを目標にします。

授業概要

伊勢物語は源氏物語と並ぶ平安時代を代表する古典文学として知られています。「むかし、をとこありけり」をどこかで聞いたことがあるでしょう。中学、高校時代に習ったことがある人も多いかと思います。在原業平（825～880）はこの物語の主人公として、今も人気が衰えません。2025 年は業平の生誕 1200 年に当たりました。これにともない展覧会が開催され、多くの作品が紹介されました。絵巻や工芸には伊勢物語を題材にした作品が残されています。これらの展覧会を参考にして、伊勢物語の美術を取り上げます。その美術とともに、物語の魅力について解説します。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

展覧会でさまざまな作品を観てください。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
レポート	70
平常の授業態度	30

教科書

教科書1	使用しません。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	『伊勢物語　造形表現集成』		
出版社名	思文閣出版	著者名	河田昌之・赤澤真理・大口裕子・伊永陽子編
参考書名2	『伊勢物語絵巻絵本大成』		
出版社名	角川学芸出版	著者名	羽衣国際大学　伊勢物語絵研究会編
参考書名3	『伊勢物語全読解』		
出版社名	和泉書院	著者名	片桐洋一
参考書名4	展覧会図録「伊勢物語　美術が映す王朝の恋とうた」2025 年 11 月 1 日～12 月 7 日		
出版社名	根津美術館	著者名	
参考書名5	特別展　生誕 1200 年「歌仙在原業平と伊勢物語」2026 年 2 月 21 日～4 月 5 日		

出版社名	三井記念美術館	著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

登録博物館の学芸員として、約 40 年間を展覧会の企画や美術品の収集、保管、展示等の実務にあたり、そのうちの約 10 年間は館長として組織運営や対外的な交流などの美術館マネージメント分野にも携わる。展覧会の企画や開催の実務、海外での作品調査の経験も多い。著書、論文が複数ある。

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	伊勢物語絵について 1（平安～江戸時代　絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風）
2	伊勢物語絵について 2（平安～江戸時代　絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風）
3	伊勢物語の絵画（絵巻 1）
4	伊勢物語の絵画（絵巻 2）
5	伊勢物語の絵画（絵巻 3）
6	伊勢物語の屏風絵 1
7	伊勢物語の屏風絵 2
8	伊勢物語の屏風絵 3
9	伊勢物語の工芸1
10	伊勢物語の工芸 2
11	伊勢物語の工芸 3
12	伊勢物語の染織
13	伊勢物語と芸能
14	伊勢物語と庭園
15	まとめ　伊勢物語の美術（総論として）

科目名	現代美術特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	永田　靖				
クラス名					

授業目的と到達目標

本講義は、20 世紀から現代に至る舞台芸術・パフォーマンスを主たる対象とし、「表象（representation）」という概念の歴史的変容と理論的射程を、批判的かつ多角的に検討することを目的とする。表象は単なる再現行為ではなく、社会的現実や主体、国家、民族、ジェンダー、文化的他者像を構築する装置として機能してきた。本講義では、家族、アジア、冷戦、インターカルチュラリズム、グローバリゼーションという五つの軸を通して、表象がいかに政治的・歴史的文脈と結びつき、権力構造と相互作用してきたのかを検証する。到達目標は次の通りである。①表象理論の主要概念（再現、代理、構築、他者化、ハイブリディティなど）を理論史的文脈の中で整理し、自らの言葉で説明できる。②具体的な舞台芸術作品を、歴史的・社会的背景と関連づけながら、理論的枠組みを用いて批判的に分析できる。③表象と国家、植民地主義、ジェンダー、文化越境、ディアスポラといった問題群との関係を、先行研究を踏まえて論証できる。④本講義で扱う議論を、自身の研究テーマと接続し、理論的枠組みの再構成や問題設定の深化に活用できる。

授業概要

本講義では、近代における家族制度の成立と崩壊をめぐる表象から出発し、帝国主義とアジア認識、冷戦期の文化外交とイデオロギー装置、ポスト冷戦期のインターカルチュラリズム、さらにグローバリゼーションの進展に伴う文化の越境と再編へと至る歴史的流れを追う。各回では、具体的な舞台作品や上演事例を取り上げながら、それらを以下の理論的視座と接続する。ポストコロニアル理論、カルチュラル・スタディーズ、パフォーマンス研究、表象論・メディア論、ナショナリズム研究、作品分析と理論的議論を往還させることで、芸術が単に社会を反映するのではなく、社会的意味を生産し、歴史的想像力を構築する営みであることを明らかにする。授業は講義形式を基本としつつ、文献講読、受講者による問題提起、ディスカッションを組み合わせ、研究志向型の討議空間を形成する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

各回で扱う作品および指定文献については、事前に読解・視聴を済ませ、議論の論点を整理しておくこと。単なる理解にとどまらず、理論的立場や問題設定の妥当性を批判的に検討する姿勢が求められる。少なくとも一度は担当発表を行い、文献の要点整理だけでなく、研究的観点からの論点提示を行うこと。最終レポートは、講義内容を踏まえつつ、自身の研究テーマと接続させた研究小論文（理論的枠組みの明示を含む）とする。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	

出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	イントロダクション―表象とは何か。表象概念の多義性を確認し、近代以降の思想史の中でその意味がどのように変容してきたかを整理する。
2	家族の表象①　イプセン『海の夫人』を題材に、近代家族制度の成立と個人の自由の問題を、ジェンダーと主体形成の観点から再検討する。
3	家族の表象②　森本薫『女の一生』を題材に、明治初期から太平洋戦争終了までの半世紀の家族が直面した家、夫婦、社会、戦争の問題を国家イデオロギーとの関係から分析する。
4	家族の表象③　松田正隆『夏の砂の上』を題材に、近代的家族制が崩壊した後の家族のあり方を探求する。
5	アジアの表象①　ロシア・バレエ団『火の鳥』を題材に、神話的物語とアジア的想像力の交差するところに現れるアジアへの特殊な観点について考察する。
6	アジアの表象②　森本薫『大川仇討』を題材に、琉球の伝統演劇と日本の植民地主義との関係を文化統治の視点から探求する。
7	アジアの表象③　平田オリザ『ソウル市民 1919』を題材に、日本の帝国主義と民族的自己表象の庶民的抗争を探求する。
8	冷戦の表象①　アメリカン・バレエ・シアターの冷戦期におけるモスクワ公演を題材に、舞台芸術が文化外交の機能を担っていたことを考察する。
9	冷戦の表象②　寺山修司『時代はサーカスの象に乗って』を題材に、1960 年代カウンターカルチャーが内包する政治的矛盾と表象戦略を検討する。
10	冷戦の表象③　林懐民作・演出、雲門舞集による『新傳』を題材に、冷戦期の東アジアにおける台湾の文化政治的な位置の動揺と緊張を探求する。
11	冷戦の表象③　林懐民作・演出、雲門舞集による『新傳』を題材に、冷戦期の東アジアにおける台湾の文化政治的な位置の動揺と緊張を探求する。
12	インターカルチュラリズムからグローバリゼーションへ②　蜷川幸雄『ハムレット』を題材に、オリエンタリズムと市場経済との共創関係を探求する。
13	インターカルチュラリズムからグローバリゼーションへ③　ロベール・ルパージュ『ブルードラゴン』を題材に、都市間の移動とディアスポラの問題を探求する。
14	インターカルチュラリズムからグローバリゼーションへ④　シドニー・オリンピック開会式のパフォーマンスを題材に、多文化主義を標榜する国家と先住民族のパフォーマンスのあり方について考察する。

15	総括と試験授業全体についてのレポート型試験を行う。	

科目名	現代美術特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	永田　靖				
クラス名					

授業目的と到達目標

本講義は、20 世紀から現代に至る舞台芸術・パフォーマンスを対象に、人間と自然との関係性をめぐる表象の変容を、環境思想・ポストヒューマン理論・エコクリティシズムの観点から批判的に検討することを目的とする。
とりわけ、人間中心主義（anthropocentrism）という近代的思考枠組みが、演劇やパフォーマンスの構造の中でどのように前提化され、あるいは揺さぶられてきたのかを問い直す。自然破壊、動物、災厄、テクノロジー、未来社会といった主題を通して、演劇が単に環境問題を表象する媒体であるにとどまらず、人間と非人間の関係性を再編する実践であることを理論的に検証する。
到達目標は次の通りである。①エコクリティシズム、ポストヒューマニズム、新唯物論などの理論的枠組みを整理し、演劇研究と接続できる。②近現代演劇作品を環境思想の観点から再読し、理論的分析を行うことができる。③災害やテクノロジーを含む「非人間的主体」の問題を、舞台芸術の構造と関連づけて論じることができる。④自身の研究テーマを環境・エコロジーの視座から再構成する可能性を獲得する。

授業概要

本講義は、エコロジーと演劇の関係を歴史的・理論的に検討する大学院レベルの講義である。
前半では、モダン・ドラマにおける自然表象や産業化と環境破壊の問題を再読し、近代演劇が自然との関係をいかに構築してきたのかを検討する。あわせて、動物を主題とするパフォーマンスや、人間中心主義の揺らぎを提示する作品を取り上げ、演劇の主体構造を問い直す。
中盤では、自然災害のみならず、戦争・原爆・核といった人為的災厄の表象を分析し、舞台芸術がいかに「破局」や「喪失」を扱ってきたのか、その倫理的・政治的射程を考察する。
後半では、ポストヒューマン思想、エコクリティシズム、アクター・ネットワーク理論などを参照しながら、現代パフォーマンスが地球規模の環境危機やテクノロジーの進展にどう向き合っているのかを検討する。さらに「エコ・ドラマツルギー」という概念を軸に、演劇が未来社会の想像力をどのように形成しうるのか、その批評的可能性を探究する。
授業は講義と作品視聴、文献講読、受講者発表、討議を組み合わせて進行する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業の理解度	40
レポート	60

教科書

教科書1	特になし		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業中に適宜紹介する		
出版社名		著者名	

参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	イントロダクション。授業全体の方向性と基本的な概念の導入を行う。
2	自然破壊とパフォーマンス（1） 主として 20 世紀のパフォーマンスを取り上げていくが、まずは自然破壊について探求した劇パフォーマンスを取り上げて考察する。第 1 回目は、いわゆるモダン・ドラマの中での自然破壊について論究したものである。『ワーニャ』『野鴨』『人民の敵』など作品中の主題と関わる形式で考察されている作品を取り上げて 20 世紀初頭のパフォーマンスの中でどのように探求されたかを考察する。
3	自然破壊とパフォーマンス（2） 20 世紀の近代化、産業化が進む過程で現実の自然破壊に向き合いながら探求した『火山灰地』『彼らの声が聞こえるか』などの作品を取り上げ、そのプロセスや意義を考察する。
4	動物のパフォーマンス（1） パフォーマンス・アートには動物を主題するものが少なからずあり、人間第一主義の超克を企てている。『コヨーテ』『毛猿』『うたよみざる』など様々なアートを例にその理念と意義を考察する。
5	動物のパフォーマンス（2） パフォーマンス・アートには動物を主題するものが少なからずあり、人間第一主義の超克を企てている。『コヨーテ』『毛猿』『うたよみざる』など様々なアートを例にその理念と意義を考察する。
6	災害と自然（1） 20 世紀に繰り返し人類を襲った自然災害についてパフォーマンスは常に取り上げてきた。地震、干ばつ、台風、森林火事など様々な自然災害についてパフォーマンスはどのように取り組んできたのか、その可能性と問題点について考察する。
7	災害と自然（2） 20 世紀に繰り返し人類を襲った自然災害についてパフォーマンスは常に取り上げてきた。地震、干ばつ、台風、森林火事など様々な自然災害についてパフォーマンスはどのように取り組んできたのか、その可能性と問題点について考察する。
8	災害と自然（3） 20 世紀に繰り返し人類を襲ったのは自然災害ばかりではなく、戦争、戦闘、爆弾、原爆、核などの人為的な災害についてももについてパフォーマンスは常に取り上げてきた。ここではそのような災害についてパフォーマンスはどのように取り組んできたのか、その可能性と問題点について考察する。
9	ポスト・ヒューマン・パフォーマンス（1） 近年のポスト・ヒューマニズムのパフォーマンスの中から特徴的なものを取り上げ、その今日的な意義を考察する。

10	ポスト・ヒューマン・パフォーマンス（2）近年のポスト・ヒューマニズムのパフォーマンスの中から特徴的なものを取り上げ、その今日的な意義を考察する。
11	エコ・ドラマツルギー（1） 現在、自然環境と文学についての取り組みの批評的アプローチは、「エコ・クリティシズム」と呼ばれる批評群が主として担っている。多くは英米圏の文学研究の中から生まれて来ているが、パフォーマンスが今日の自然環境問題、地球規模の温暖化、環境破壊にどう対処できるのか、その方向については主だった批評軸はいまだ確立されていない。ここでは、様々な実例を取り上げながら「エコ・ドラマツルギー」の可能性を考察する。
12	エコ・ドラマツルギー（2） 現在、自然環境と文学についての取り組みの批評的アプローチは、「エコ・クリティシズム」と呼ばれる批評群が主として担っている。多くは英米圏の文学研究の中から生まれて来ているが、パフォーマンスが今日の自然環境問題、地球規模の温暖化、環境破壊にどう対処できるのか、その方向については主だった批評軸はいまだ確立されていない。ここでは、様々な実例を取り上げながら「エコ・ドラマツルギー」の可能性を考察する。
13	未来社会とエコロジー（1） 高度に発達した情報科学技術は人間社会を根本的に変化させつつあるが、そのエコロジーを考察するのが急務となっている。テクノロジーの描く未来社会についても数多くのパフォーマンスが取り組んでその意義を考察している。ここではこれらのテクノロジーと人間の問題をパフォーマンスがどのように向き合っているのか考え、未来のエコロジカル・パフォーマンスを展望する。
14	未来社会とエコロジー（2） 高度に発達した情報科学技術は人間社会を根本的に変化させつつあるが、そのエコロジーを考察するのが急務となっている。テクノロジーの描く未来社会についても数多くのパフォーマンスが取り組んでその意義を考察している。ここではこれらのテクノロジーと人間の問題をパフォーマンスがどのように向き合っているのか考え、未来のエコロジカル・パフォーマンスを展望する。
15	授業全体のまとめを行うため、試験的レポートを課す。

科目名	工芸・デザイン学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	瀧本　雅志				
クラス名					

授業目的と到達目標

デザインは、いまや様々な領域におよぶ活動へと拡大・変質している。当授業では、そうした様々なデザインの営みの諸相を広く見渡し、その各々の活動の意味や他のデザイン活動との関係性への理解を深めることを目的とする。そのなかで、芸という営為がこれからどのような可能性を持ちうるかへの問題意識を高めること、そしてデザインという活動全体への現代的な眼差しを涵養することが、目標となる。

授業概要

【対面授業】最初に、工芸とは何かについて、日本の近代化の過程を振り返りながら考察する。また。それがデザインという問題意識と、いかなる関係を結んできたかを、近代工芸運動を概観しつつ考える。続けて、様々なデザインの分野を取り上げ、各々の注目すべき事例を中心に検討してゆく。「デザイン史」の授業とは異なり、歴史を体系的に辿る以上に、工芸やデザインの感覚や思考をアクチュアルに触発する作品や現象の主題的な分析に重点を置く。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

明るく楽しく元気に受講して下さい。授業内のみで「学習」を受動的に完結させるのではなく、自ら積極的に「学外」（本、図版、モノ、インターネット、まち、等々）へアクセスして、自己を活性化させてゆくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
期末試験（レポートあるいは発表）	30
平常点	70

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	「イントロダクション：工芸とは何か？」：「工芸」という概念が、いかにして形成されてきたかを、明治期の日本の近代化の黎明期に遡って検討する。その検討の過程で、「工芸」と「美術」と「技術」の違いという重要な問題についても、歴史的に考えてゆく。
2	「〈日本的なるもの〉と工芸・デザイン」：〈日本的なるもの〉への自意識は、明治以前には基本的になかったはずだ。では、それはいつどのような状況で登場しだし、その初期には何が〈日本的〉とアピールされ、工芸はいかなる役回りを演じたのか？　また、〈日本的な〉工芸・デザインとはどのようなものと見なされ、それが時代を通じて不変なのかどうかも考察の対象とする。
3	「ヨーロッパにおける近代工芸運動」：近代における工芸の改革運動とは、どのような問題意識を持ち、どのような成果を出しながら、進展していったか？　ウィリアム・モリスからバウハウスまでを一気に概観することで、近代工芸運動に働く方向性のいくつかを明確化してゆく。
4	「日本における近代工芸運動」：柳宗悦の民芸運動について検討する。彼の唱えた「用の美」の思想や、彼と協力関係にあった工芸家たちや彼らの認めた無名の工人たちの工芸品を振り返るとともに、日本民藝館の活動にも注目してゆく。
5	「近代装飾と近代絵画」：近代絵画が平面イメージ化し、それが壁面装飾化＝装飾壁面化してゆく諸例に注目する。マネ、モネ、ゴーギャン、ナビ派、クリムト、マチス、ポロック等々。また、そうした絵画の傾向に関わる理論として、ミシェル・フーコーやクレメント・グリーンバーグの言説も参考にする。
6	「近代建築の平面と工芸」：近代建築に特徴的なベクトルのひとつは、水平面と垂直面による平面的構成にあった。その顕著な例として、ル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエのいくつかの作品に注目する。また、そうした発想を、電灯や椅子から建築までに貫いて用いたヘリット・リートフェルトの作品を顧みる。
7	「ファッションと空間デザイン」：衣服が単に着るためのものではなく、ファッションとして市民へ開かれてゆくのは、主にフランス革命以降である。だが、市民はすぐさまファッショナブルに変貌しえた訳ではなかった。それには、ファッションが夢のイメージとして上映される空間が、大きな意味を果たしていた。パッサージュ。そして初期のデパートの空間デザインについて、振り返る。
8	「流行とブランドのデザイン」：19 世紀半ばにシャルル・フレデリック・ウォルトの発明した、オート・クチュールという装置の画期性について見てゆく。またあわせて、ウォルト以前の。ファッションが必ずも衣服のデザインのみを指さなかった時代について確認する。そのなかで、ファッションにおいて明白に存在する建築的次元について注目する。
9	「洋服を超える〈ファッション〉デザイン」：60 年代になると。トータルなライフスタイルの提言や実践として、ファッションが加速し始める。言い換えるなら、〈ファッション〉は、洋服だけの問題ではなく、他のファッショナブルなデザインと密接に連携することになる。60 年代ロンドンのファッション・シーン、そしてピエール・カルダンのデザイン戦略を検討する。
10	「ミュージシャンのファッション・デザイン」：第 9 回目とほぼ同じ問題意識から、今回は、特にポップミュージック・シーンのなかで発信されてきた広義の〈ファッション〉デザインについて、時代を振り返り概観してゆく。モッズ、パンク、ニューウェーヴ、グラム、ニューロマンティック、グランジなどを中心に講義する。
11	「ファッションと現代建築のデザイン」：2000 年代に入ると、表参道には高級ブランドのファッションビルが次々と建ち始める。その設計は、各々が気鋭の現代建築家たちによるもので、表参道は以降、現代建築のショーケースとなる。また、2006～7 年に LA の現代美術館で開催された「Skin +

	Bones」展では、ファッションと建築の交錯する諸例が示された。以上 2 つの方向から、両デザインの複合を検証する。
12	「グラフィックデザインと都市・建築」: 建物や都市のペーパー上でのデザインに新たな建築の可能性を見出した、アーキグラムをはじめとする 60 年代のアンビルトのデザインの可能性を探る。また、広告看板や、壁面への巨大なグラフィックが、建築や都市の空間性を大きく変容させる力について、ヴェンチューリの言説やスーパーグラフィックスの実践を考察する。
13	「ポストモダンデザイン」: 70 年代後半以降の世界のポストモダン建築にくわえて、日本のバブル期のそれについても具体例を見てゆく。チャールズ・ジェンクスの建築思想や、ジャン・フランソワ・リオタールのポストモダン概念も参照する。
14	「ミニマルデザインと建築」: 最小限のデザインについて、批判的に考える。ミース・ファン・デル・ローエ、ミニマリズムのアートのほか、90 年代以降のポスト・ミニマル建築の作品を分析し、現代におけるミニマルデザインの射程についても見定めてゆく。
15	「グローバルスタイルのデザイン」: グローバリゼーションの時代に、クールで経済的で市民に開かれた先端技術の建築イメージを提示しているレンゾ・ピアノ、ノーマン・フォスター、リチャード・ロジャースの建築デザインを検討してゆく。

科目名	工芸・デザイン学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	瀧本　雅志				
クラス名					

授業目的と到達目標

デザインは、いまや様々な領域におよぶ活動へと拡大・変質している。当授業では、そうした様々なデザインの営みの諸相を広く見渡し、その各々の活動の意味や他のデザイン活動との関係性への理解を深めることを目的とする。そのなかで、芸という営為がこれからどのような可能性を持ちうるかへの問題意識を高めること、そしてデザインという活動全体への現代的な眼差しを涵養することが、目標となる。

授業概要

【対面授業】前期の内容を引き継ぎながら、さらに深く掘り下げつつ、前期には触れられなかったデザインの諸相に触れてゆく。よって、工芸とは何かについて、日本の近代化の過程を振り返りながら考察する。また。それがデザインという問題意識と、いかなる関係を結んできたかを、近代工芸運動を概観しつつ考える。さらには、様々なデザインの分野を取り上げ、各々の注目すべき事例を中心に検討してゆく。「デザイン史」の授業とは異なり、歴史を体系的に辿る以上に、工芸やデザインの感覚や思考をアクチュアルに触発する作品や現象の主題的な分析に重点を置く。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

明るく楽しく元気に受講して下さい。授業内のみで「学習」を受動的に完結させるのではなく、自ら積極的に「学外」（本、図版、モノ、インターネット、まち、等々）へアクセスして、自己を活性化させてゆくこと。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
期末試験（レポートあるいは発表）	30
平常点	70

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1			
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	「イントロダクション／構造デザイン」：後期の開講にあたり、後期に予定される授業内容を概論的に提示する。また、構造デザインについて概説する。構造は、建築において必ずしも黒子ではない。構造が優れたデザインとなって明示的に現れた諸例を紹介する。とりわけ、構造上の工夫や複雑な構造計算を要する近現代建築のある種のタイプでは、すぐれた構造家はスター的存在感を発揮してきた。ピーター・ライス、佐々木睦朗、セシル・バルモンドらの作例を見ながら、構造デザインの美学を検討する。
2	「都市デザイン」：過去の都市デザインの中から、とりわけ重要と思われる事例を再考する。オスマンのパリ改造やグランプロジェなどの実現例はもちろん、ル・コルビュジエ、レム・コールハース等の過剰な都市デザインの思想も、考察の材料とする。
3	「ランドスケープデザイン」：都市の公共空間デザインや造園デザインと重なりつつも、それらとは微妙に異なるランドスケープデザインの可能性の中心を見据える。それは、ランドスケープ（＝風景）という概念の発生やその変遷を顧みる試みの意義も持つ。建物とランドスケープのデザインが一体連続化した現代の諸例についても見てゆく。
4	「日本のインテリアデザイン」：近代化以降の日本の住環境をめぐる歴史を概観する。室内空間のデザインにくわえて、家具や環境のデザインも考察する。また、剣持勇や倉俣史朗といったデザイナーについても概説する。
5	「タイポグラフィーのデザイン」：産業化時代、バウハウス、国際タイポグラフィック様式、ニューヨーク派、ニューウェーヴ派、コンピュータ作成のタイポグラフィについて、時代順に概観してゆく。特に、国際タイポグラフィック様式にスポットをあてる。
6	「サウンドデザインと空間デザイン」 ：音楽は、音により空間を変容させ、新たな空間性を創造してゆく行為だという意識が、ある時期以降活性化しだす。現代音楽における空間デザイン、またポップミュージックに浮上した空間デザインの先駆的例について、体験する機会を設ける。後者については、特に奇才フィル・スペクターに注目する。
7	「サウンドデザインとコンセプチュアル・アルバム」：前回に引き続き、今回は 60 年代のポップミュージックにおけるサウンドデザインの意識の高まりを検討してゆく。ビーチボーイズ、ビートルズ、そしてフィル・スペクターの回帰について検討しながら、コンセプトアルバムというアイデアや、彼らのサウンドデザインのその後への影響について探ってゆく。
8	「映画のタイトルデザイン」：映画の冒頭に作品名や人名等とともに登場するタイトルのいくつかは、本の表紙以上に作品の印象を最初に効果的に告げる優れたデザイン性を見せる。ソウル・バス、カイル・クーパー等による魅力的な作品例に目を向ける。
9	「TV ゲームとブックデザイン」：TV ゲームが新しいメディアとして大きな可能性を感じさせた時代があった。パソコンやインターネットが普及する前夜とも言うべき、80 年代後半から 90 年代前半にかけてだ。この時期、そうした可能性をいかに本にして告げるかというデザイン目標を持った本が登場した。それらを紹介しつつ、新旧メディアの動的な関係性についてケーススタディする。
10	「展覧会とアートスペースのデザイン」：美術館と作品の関係は歴史的に一様ではないし、展示のデザインも時代や美術館や展覧会のタイプによって異なる。それらのデザインをいくつかに大別しながら、各々の代表例を見てゆく。
11	「CI のデザイン」：会社というそのままでは目には見えない組織のイメージを、どう戦略的に統一化して社会へ訴求してゆくか。そうした問題をデザインによって解決する手法について考えてゆく。高級ブランドのロゴのデザインの高級性についても検討する。

12	「情報デザイン」：いかに情報をわかりやすく効果的に伝えるかという意味で、ますます情報デザインは、われわれに必須のリテラシーと化している。情報デザインという考え方がいかにして登場し、どのような有効性を持つかを、ペーシックに確認してゆく。オットー・ノイラート、エドワード・タフティ、アフォーダンスなどにも注目する。
13	「キャリアデザイン」：こうした言葉があるからには、職業人生は、いまやデザインするものとも考えられているようだ。しかし、キャリアをデザインすることとは、就職活動上や実際の仕事上やキャリアアップ戦略上の能力アップとでは、どう異なるのか？　キャリア「デザイン」という言説の作動する状況やその功罪について、批判的に分析する。
14	「コミュニティデザイン／ソーシャル・デザイン」：社会や地域は、放っておいてもプラスの方向には向かわないかもしれない。計画でも単なる実践行為でもなく、コミュニティや社会をデザインするとはどういうことか？　そのポジティヴな諸例を参照してゆく。
15	「まとめ」：これまでの授業を振り返り、総括や重要点の確認を行う。また、これまでに言及していないが重要なトピックについて、受講する学生の関心も踏まえながら、補足的にいくつか説明する。

科目名	文芸学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	団野　恵美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

この授業では、英国の風土や歴史を基にしながら、社会文化や風俗習慣、人々の日常生活を図版や映像を使って紹介していく。日本の文化と比較しながら、様々なトピックについて小説を読んだり映画を見ることでイギリス文学の背景を知る。

授業概要

毎回ハンドアウトを配布し、あるテーマにそってイギリスの文化と文学を理解する知識を学ぶ。英国といえばアフタヌーン･ティーやピーター･ラビットがすぐ浮かぶが、この紅茶の伝統も、本はといえば中国や日本の茶から始まったこと、あのかわいいピーター･ラビットは英国の自然環境を守るナショナル･トラストの影の功労者となっていること、ハリー･ポッターには英国の教育制度が色濃く現れていることなどが分かるだろう。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

授業時に、読むべき小説や映画、参考文献などを紹介するので、様々な文学作品に触れることが望ましい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業貢献度	70
授業内発表	30

教科書

教科書1	毎回授業時にハンドアウトを配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業時に指示する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス：英国は 1 つなのか？イングランド、ウェールズ、スコットランドと北アイルランドのお話
2	イギリスのファッション（1）贅沢禁止法とファッションの流行を歴史的に考察する
3	イギリスのファッション（2）イギリス 16 世紀にプロジェクトXを立ち上げた貴族たち
4	教育制度とハリー・ポッター　ハリ―たちが勉強した寮生活とは
5	英国王室と王の結婚　ノルマン人による征服から始まる王家の歴史について
6	王室の歴史
7	ナショナル・トラストとピーター・ラビット　自然を保護するために購入するという考え
8	英国料理は不味いのか　ヘンリー8 世が食べていたもの
9	料理と小説　イギリス流食事風景
10	イギリスのスポーツ（1）登山、ボート、テニス、魚釣り・・・すべてスポーツ
11	イギリスのスポーツ（2）
12	イギリスの医療と福祉　病院の成り立ち
13	イギリス映画と文化表象　イギリス人の暮らしがわかる映画
14	イギリス小説あれこれ
15	まとめ

科目名	文芸学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	団野　恵美子				
クラス名					

授業目的と到達目標

この授業では、英国の風土や歴史を基にしながら、社会文化や風俗習慣、人々の日常生活を図版や映像を使って紹介していく。日本の文化と比較しながら、様々なトピックについて小説を読んだり映画を見ることでイギリス文学の背景を知る。

授業概要

毎回ハンドアウトを配布し、あるテーマにそってイギリスの文化と文学を理解する知識を学ぶ。英国といえばアフタヌーン･ティーやピーター･ラビットがすぐ浮かぶが、この紅茶の伝統も、本はといえば中国や日本の茶から始まったこと、あのかわいいピーター･ラビットは英国の自然環境を守るナショナル･トラストの影の功労者となっていること、ハリー･ポッターには英国の教育制度が色濃く現れていることなどが分かるだろう。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

授業時に、読むべき小説や映画、参考文献などを紹介するので、様々な文学作品に触れることが望ましい。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業貢献度	70
授業内発表	30

教科書

教科書1	毎回授業時にハンドアウトを配布する。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業時に指示する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス：前期の復習と後期の内容
2	絵画からみる文化
3	イギリス人にとっての肖像画　肖像画は何を伝えようとしているのか
4	パブの文化　ビールの歴史
5	紅茶とイギリス文化（1）　アフタヌーンティ
6	紅茶とイギリス文化（2）
7	イギリス映画
8	イングリッシュ・ガーデンの歴史（1）　庭園と文学、絵画のつながり
9	イングリッシュ・ガーデンの歴史（2）
10	ヴィクトリア朝とシャーロック・ホームズ　探偵小説の舞台
11	イギリス演劇とシェイクスピア
12	エリザベス朝の文化
13	イギリスの児童文学（1）
14	イギリスの児童文学（2）
15	まとめ

科目名	演劇学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	出口　逸平				
クラス名					

授業目的と到達目標

オペラから映画まで、「身体と言葉」の芸術である演劇を幅広くとらえ、その特徴を丁寧に探る。
受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。
この授業が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている

授業概要

受講者の研究発表と質疑応答によって、授業をすすめる。
取り上げる作品は、受講者の希望をできるかぎり尊重したい。
随時 DVD（演劇・映画等　大阪芸術大学図書館所蔵）を利用する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

受講者それぞれが、まずは自分の興味のありかをよく探ってほしい。
相談や質問には、丁寧に答えていく。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	各人のテーマに応じて随時紹介する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	授業の進め方、発表日程や作品について相談する。
2	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
3	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
4	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
5	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
6	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
7	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
8	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
9	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
10	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
11	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
12	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
13	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
14	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
15	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。

科目名	演劇学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	出口　逸平				
クラス名					

授業目的と到達目標

オペラから映画まで、「身体と言葉」の芸術である演劇を幅広くとらえ、その特徴を丁寧に探る。
受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。
この授業が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている

授業概要

受講者の研究発表と質疑応答によって、授業をすすめる。
取り上げる作品は、受講者の希望をできるかぎり尊重したい。
随時 DVD（演劇・映画等　大阪芸術大学図書館所蔵）を利用する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

受講者それぞれが、まずは自分の興味のありかをよく探ってほしい。
相談や質問には、丁寧に答えていく。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	各人のテーマに応じて随時紹介する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項
教員実務経験
授業計画（各回予定）

授業回	授業内容
1	授業の進め方、発表日程や作品について相談する。
2	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
3	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
4	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
5	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
6	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
7	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
8	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
9	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
10	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
11	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
12	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
13	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
14	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。
15	授業時間は、受講者それぞれのテーマに応じた研究発表と討論に充てられる。

科目名	音楽学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	前川 陽郁				
クラス名					

授業目的と到達目標

東ヨーロッパの音楽の独自性について考える。

授業概要

東ヨーロッパの音楽は、ドイツやイタリアなどとは異なった独自性を持っている。ショパンやリストのように東ヨーロッパの出身でありながらフランスなどで活躍した作曲家の音楽も含めて、東ヨーロッパの音楽の特質について考える。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

常に音楽の実感を持ちながら考えること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
期末レポート	100

教科書

教科書1	使用しない。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業時に適宜紹介する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ショパンとポーランド１
2	ショパンとポーランド２
3	リストとハンガリー1
4	リストとハンガリー2
5	18 世紀までの東ヨーロッパの音楽状況１　中世とルネサンス
6	18 世紀までの東ヨーロッパの音楽状況２　バロックと古典派の時代
7	スメタナとチェコ
8	ドヴォルザーク１
9	ドヴォルザーク２
10	ヤナーチェク
11	ルーマニア　　エネスクを中心として
12	バルトーク
13	バルトークとコダーイ
14	シマノフスキー
15	マルティヌー

科目名	音楽学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	前川　陽郁				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽と舞踊との関係について考える。

授業概要

音楽は、歴史的にも、現在の状況を考えても、舞踊との密接なつながりがある。なぜ、どのように音楽と舞踊とが結びつくのかという視点を中心にして、音楽の特質について考える。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

常に音楽の実感を持ちながら考えること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
期末レポート	100

教科書

教科書1	使用しない。		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	授業時に適宜紹介する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	チャイコフスキーよりも前のバレエ音楽 1 プーニ『エスメラルダ』、ミンクス『ドン・キホーテ』など
2	チャイコフスキーよりも前のバレエ音楽 2 アダン『ジゼル』、ドリーブ『コッペリア』など
3	バレエ音楽の改革者としてのチャイコフスキー1 『白鳥の湖』など
4	バレエ音楽の改革者としてのチャイコフスキー2 『くるみ割り人形』、『眠れる森の美女』など
5	ロシア・バレエ団のバレエと音楽 1 ストラヴィンスキー『火の鳥』、『ペトルーシュカ』など
6	ロシア・バレエ団のバレエと音楽 2 ストラヴィンスキー『春の祭典』、ドビュッシーによる『牧神の午後』など
7	ロシア・バレエ団のバレエと音楽 3 ラヴェル『ダフニスとクロエ』、サティ『パラード』など
8	ロシア・バレエ団以外の 19、20 世紀のバレエと音楽 ドリーブ『コッペリア』、プロコフィエフ『ロメオとジュリエット』など
9	バロック時代の舞踊と組曲
10	オペラと舞踊 ヴェルディ『アイーダ』、ボロディン『イーゴリ公』など
11	舞踊音楽以外の音楽への振付 ショパンの音楽による『レ・シルフィード』、シェーンベルク『浄められた夜』など
12	モダン・バレエ、モダン・ダンスと音楽 1 キリアン、ベジャールなどの振付作品
13	モダン・バレエ、モダン・ダンスと音楽 2 カニンガム、フォーサイス、マリファントなどの振付作品
14	日本の舞踊の音楽
15	音楽というより音響とともに踊ること

科目名	音楽史学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	津上　智実				
クラス名					

授業目的と到達目標

ヘンデルのオラトリオ《メサイア》を考える。《メサイア》は、数あるオラトリオ作品の中でも長年、世界の様々な場所で継続的に歌われてきている点で突出した存在である。この《メサイア》の演奏史を、イギリスから始めて、アメリカ、日本へと視野を広げて展望する。多くの団体によって定期的・継続的に演奏され続けてきた要因を、《メサイア》の歌詞と楽曲の構造に遡って考えることで、音楽作品とは何か、作品の演奏とはどのような可能性を持っているのかについての理解を深める。

授業概要

前期では、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》が多くの団体によって定期的・継続的に演奏され続けてきた要因を、《メサイア》の歌詞と楽曲の構造に遡って考える。後期では、イギリスを始めとする諸国で、誰によって、どこで、どのように歌われてきたのかを、アメリカや日本を含めて考察する。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

よく聴く、よく読む、よく考える。折々に小さな課題を出すので、主体的に積極的に取り組むこと（週 90 分程度）。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業態度	30
議論への参加度	20
中間・期末レポート	50

教科書

教科書1	『ヘンデル：メサイア　HWV 56』ベーレンライター社、新ヘンデル全集版、小型スコアが望ましいが、別の版が手元にあればそれでも可（ヴォーカル・スコアではなくオーケストラ譜付きのものを用意すること）		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	『ヘンデル』		
出版社名	東京書籍、1991	著者名	クリストファー・ホグウッド著、三澤寿喜訳
参考書名2	『ヘンデル：創造のダイナミズム』		
出版社名	春秋社、2009	著者名	ドナルド・バロウズ編、藤江効子、小林裕子、三ケ尻正訳
参考書名3	Handel, Messiah（Cambridge music handbooks）		
出版社名	Cambridge U.P., 1991	著者名	Donald Burrows
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			

出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験
音楽学の研究者が、多数の論考や学会発表をしてきた経験を活かして、音楽作品とその演奏について考える方法を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入
2	オラトリオのテクスト
3	《メサイア》の台本作者と時代背景
4	オラトリオの音楽構造
5	《メサイア》の基本的な音楽構造
6	《メサイア》のレチタティーヴォ
7	《メサイア》のアリア
8	《メサイア》の合唱
9	〈ハレルヤ〉の優位性
10	《メサイア》演奏の問題点
11	《メサイア》演奏の実際的な工夫
12	《メサイア》演奏の現状
13	《メサイア》演奏の今後
14	《メサイア》にみる作品と演奏の可能性
15	総括

科目名	音楽史学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	津上　智実				
クラス名					

授業目的と到達目標

ヘンデルのオラトリオ《メサイア》を考える。《メサイア》は、数あるオラトリオ作品の中でも長年、世界の様々な場所で継続的に歌われてきている点で突出した存在である。この《メサイア》の演奏史を、イギリスから始めて、アメリカ、日本へと視野を広げて展望する。多くの団体によって定期的・継続的に演奏され続けてきた要因を、《メサイア》の歌詞と楽曲の構造に遡って考えることで、音楽作品とは何か、作品の演奏とはどのような可能性を持っているのかについての理解を深める。

授業概要

後期では、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の演奏史を考える。イギリスを始めとする諸国で、誰によって、どこで、どのように歌われてきたのかを、アメリカや日本を含めて考察する。これらを通じて、音楽作品とは何か、作品の演奏とはどのような可能性を持っているのかについての理解を深める。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

よく聴く、よく読む、よく考える。折々に小さな課題を出すので、主体的に積極的に取り組むこと（週 90 分程度）。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
授業態度	30
授業内発表 および ミニ・レポート	20
中間・期末レポート	50

教科書

教科書1	『ヘンデル：メサイア HWV 56』ベーレンライター社、新ヘンデル全集版、小型スコアが望ましいが、他の版が手元にあればそれでも可（ヴォーカル・スコアではなくオーケストラ譜付きのものを用意すること）		
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	『メサイア—理解と演奏のためのスタディガイド』		
出版社名	パナムジカ、2019	著者名	ヘルムート・リリング、菅野弘久他訳
参考書名2	『ヘンデル：創造のダイナミズム』		
出版社名	春秋社、2009	著者名	ドナルド・バロウズ編、藤江効子、小林裕子、三ケ尻正訳
参考書名3	『メサイアは何を歌うのか』		
出版社名	聖公会出版、2008	著者名	家田足穂
参考書名4	Handel, Messiah（Cambridge music handbooks）		
出版社名	Cambridge U.P., 1991	著者名	Donald Burrows
参考書名5	『ヘンデル』		

出版社名	東京書籍、1991	著者名	クリストファー・ホグウッド著、三澤寿喜訳

参考 URL

特記事項

教員実務経験
音楽学の研究者が、多数の論考や学会発表をしてきた経験を活かして、音楽作品とその演奏について考える方法を指導する。

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入
2	オラトリオとは何か
3	ヘンデルのオラトリオ作品
4	《メサイア》の成立とダブリン初演
5	《メサイア》のロンドン初演とその後
6	ヘンデル記念祭と《メサイア》
7	18、19 世紀の《メサイア》演奏
8	アメリカの《メサイア》演奏
9	日本の《メサイア》演奏：本邦初演
10	日本の《メサイア》演奏：関西の場合
11	日本の《メサイア》演奏：関東の場合
12	日本の「大学メサイア」
13	日本の「高校メサイア」
14	日本の《メサイア》演奏：現状と課題
15	総括

科目名	音楽芸術学特論1	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 前期	形態	講義		
教員名	田之頭　一知				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽を学問的に研究することの意義を明らかにすることを目的とし、音楽を論理的に考察し、それを文章化することを目標とする。

授業概要

音楽を音楽として扱うことが、音楽を学問的に研究する場合に必要な態度である。しかし、それはいったいどのようなことなのか。本講義では音楽学、なかんずく、音楽美学あるいは音楽哲学と呼ばれる学問領域に根差しつつ、音楽観の変遷を辿りながら音楽の本質あるいは原理的基盤に関して講義を進めてゆく。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

西洋において音楽は古来、字問的なものとみなされてきた。それが何を意味するのかを各目で考えてもらいたい。なお、授業計画に関しては、必要に応じて変更することがあるので、注意すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価（前期末レポートを含む）	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	必要があれば授業中に指示する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	ガイダンス：西洋音楽思想の概略
2	古代ギリシアの音楽観
3	中世・ルネサンスの音楽観①
4	中世・ルネサンスの音楽観②
5	近世の音楽観
6	近代の音楽観①
7	近代の音楽観②
8	20 世紀の音楽観①
9	20 世紀の音楽観②
10	音楽哲学の諸問題：音楽と時間
11	音楽哲学の諸問題：音楽と空間
12	音楽哲学の諸問題：音楽と言語
13	音楽哲学の諸問題：音楽演奏について
14	音楽哲学の諸問題：音楽作品の所在
15	まとめと展望：音楽藝術あるいはアートとしての音楽

科目名	音楽芸術学特論2	年次	1	単位数	2
授業期間	2026 年度 後期	形態	講義		
教員名	田之頭　一知				
クラス名					

授業目的と到達目標

音楽を学問的に研究することの意義を明らかにすることを目的とし、音楽を論理的に考察し、それを文章化することを目標とする。

授業概要

音楽を音楽として扱うことが、音楽を学問的に研究する場合に必要な態度である。しかし、それはいったいどのようなことなのか。本講義では音楽学、なかんずく、音楽美学あるいは音楽哲学と呼ばれる学問領域に根差しつつ、19 世紀ロマン派音楽におけるピアノ曲に焦点を当てて、音楽の本質あるいは原理的基盤に関して講義を進めてゆく。

準備学修（予習・復習）・受講上の注意

西洋において音楽は古采、字問的なものとみなされてきた。それが何を意味するのかを各目で考えてもらいたい。なお、授業計画に関しては、必要に応じて変更することがあるので、注意すること。

成績評価方法・基準

種別	割合（%）
総合評価（学年末レポートを含む）	100

教科書

教科書1			
出版社名		著者名	
教科書2			
出版社名		著者名	
教科書3			
出版社名		著者名	

参考書・参考文献

参考書名1	必要があれば授業中に指示する。		
出版社名		著者名	
参考書名2			
出版社名		著者名	
参考書名3			
出版社名		著者名	
参考書名4			
出版社名		著者名	
参考書名5			
出版社名		著者名	

参考 URL

特記事項

教員実務経験

授業計画（各回予定）	
授業回	授業内容
1	導入：19 世紀ロマン派音楽におけるピアノ曲の立ち位置
2	ポエジーと歌
3	ショパンの場合：練習曲
4	ショパンの場合：前奏曲
5	ショパンの場合：第 2 ソナタ
6	ショパンの場合：第 3 ソナタ
7	シューマンの場合：交響的練習曲
8	シューマンの場合：クライスレリアーナ
9	シューマンの場合：幻想小曲集
10	リストの場合：超絶技巧練習曲
11	リストの場合：巡礼の年第 1 年スイス
12	リストの場合：ピアノソナタ
13	ブラームスの場合：ピアノソナタ第 3 番と晩年の小品集
14	20 世紀音楽におけるピアノ曲の特質
15	まとめと展望：ロマン派から 20 世紀音楽へ